平成 31 年度　沖縄県立芸術大学附属研究所公開講座
「組踊を多角的に考える　―初演から 300 年―」講座概要

芸術文化学部門　鈴木耕太

本講座は、1719 年に初演され、2019 年で 300 年の節目を迎える「組踊」について総合的に学ぶ事を目的として開催した。

組踊は琉球古典語、琉球古典音楽、琉球舞踊を基本とした所作の３つの要素で構成された琉球の古典劇である。尚敬王冊封の際､躍奉行に任命された玉城朝薫によって創作され、その後の行われた冊封の宴席に必ず供される芸能であった。

明治以降は各地の芝居小屋や村芝居などで演ぜられ、戦後は国の重要無形文化財に指定される。現在は組踊の地謡・立方ともに人間国宝に指定され、若手の育成や「新作組踊」の創作など、今後の組踊という芸術の展開も期待できる。

本講座は組踊の記念すべき年に、研究・実演の分野から専門家を招き、組踊についてさまざまな立場・角度から最新の研究成果や芸談を語っていただき、組踊そのものや組踊研究に興味を持っていただく内容となったと感じている。

第１回は鈴木が「組踊とは～鑑賞のすすめ」と題して､組踊の鑑賞方法や内容､作品ジャンルなどについて発表した。組踊を構成する小道具や衣装、音曲、所作を検証することで、場面や状況によって「型」や「約束事」が存在することを紹介した。

第２回は崎原綾乃氏による「近世における組踊上演について」というテーマで発表いただいた。崎原氏は尚家文書や『琉球戯曲集』などの資料から、どのような作品が近世において上演されたかを紹介いただき、近世における組踊上演史の一端を報告いただいた。それを受けて第３回は鈴木が「近代～戦前における組踊上演について」を報告した。近代の新聞資料から上演が確認できる組踊作品を概観することで、第２回の崎原氏の発表と合わせて組踊の初演から戦前までの上演史の概略を捉えることができたと思われる。

第４回は、国立劇場おきなわ運営財団調査養成課長である茂木仁史氏に「組踊と舞台」というテーマでご発表いただいた。茂木氏はこれまで国立劇場にて培った経験から、日本芸能の舞台構造を説明し、それと対比しながら組踊初演の舞台についての考察を報告いただいた。現在の組踊上演とは全く異なる近世の舞台構造を報告していただき、まさに最先端の琉球芸能研究の一端であると感じる事ができる発表であった。

第５回は麻生伸一氏（全学教育センター准教授）による「冊封と芸能～儀礼としての観点から」というテーマで報告いただいた。芸能研究ではあまり考える事のない「冊封」という儀礼と「芸能」の関係を、尚家文書の爬龍船関係資料から紹介いただいた。組踊とともに行われた王府芸能について、歴史学からの視点で報告いただいた。

第６回は本研究所共同研究員の我部大和氏に「故事集～組踊の漢訳について～」という

テーマで発表いただいた。組踊の漢訳、つまり冊封使が事前に読んだ組踊の内容について、組踊台本との内容の異同や、資料そのものの作成方法など、氏がこれまで行ってきた細かな研究成果に基づく発表であった。

第７回は西岡敏氏（沖縄国際大学教授）による「組踊の台詞について～敬語表現から」という言語学の視点から「組踊」を考察する発表をしていただいた。組踊台本の詞章を敬語の視点から分析することは、琉球の劇文学における身分関係を明らかにする事につながり、発表からは、今後の新作組踊を創作する際にもヒントとなり得る詞章の敬語関係を考えることができたと感じられる。

第８回からは組踊の実演に関わる型に登壇いただき、現在演じている組踊の現状やその環境などについてご報告いただいた。本学卒業生である金城裕幸氏には、氏が携わっている組踊道具・衣装製作について、「組踊の小道具について」というテーマでご発表いただいた。沖縄戦で多くの衣装・小道具が消滅したが、師匠の島袋光史氏が復活させた小道具製作技術の現状と、王国時代の衣装の復元の実例を報告いただき、これからの組踊上演と衣装小道具についてのあり方などを学ぶことができた。

第９回は組踊地謡として活躍なさっている新垣俊道氏を招き、「組踊と琉球古典音楽」というテーマでご発表いただいた。琉球古典音楽の実演家としての視点から、組踊作品における音楽の役割や、各場面における琉球古典音楽の効果についてわかりやすく説明いただき、組踊を鑑賞する際の手引きともいえる講座であった。

第10回は組踊立方であり、国立劇場おきなわ芸術監督の嘉数道彦氏による「新作組踊について」の発表であった。嘉数氏は実演家でありながらこれまで数作の組踊を創作しており、作家としての視点、そして実演家としての視点から「新作組踊」や組踊作品の「型」についてご報告いただいた。

第11回と第12回は初の試みで宮城能鳳氏（組踊立方人間国宝 県立芸大名誉教授）と西江喜春氏（組踊音楽歌三線人間国宝 県立芸大名誉教授）を招き、「私と組踊」という題で、人間国宝であるご自身の芸談を語っていただいた。いずれも本土復帰後における文化財指定が組踊の伝承に大きな変化をもたらしたことがわかる内容であり、今後の組踊研究だけでなく、実演家を目指す人たちに参考になる内容であった。なお、本概要の後に宮城氏・西江氏の講演録を掲載した。ご参照いただきたい。講演録の文字起こしは石橋佐紀子さん（本学大学院音楽学専攻１年次）にお骨折りいただいた。

第13回は大城學氏（岐阜女子大学教授）による「沖縄各地の組踊」というテーマのご発表であった。長年、沖縄県文化財課でお勤めになり、さらに国立劇場おきなわに深く関わってきた見識から、地方の組踊の魅力や上演に必要な演者以外の働き、そして「生きた芸能」としての組踊の姿を豊富な資料とともにご紹介いただいた。

最終回となる第14回は鈴木が担当し、「組踊を研究すること」をテーマに発表した。主にあまり知られていない組踊研究について、その研究史をなぞらえながら、文学的研究・小道具や意匠の研究・作品研究や音楽表現、そして演出、さらには舞台空間など、組踊上

演を批判的に捉え、次世代の研究につながるような問題提起を行った。

今回の公開講座は、「組踊」をいう一つの芸術について、研究や実演、そして関連する研究分野も交えた、深い内容の講座になった。ご登壇いただいた先生方に改めて感謝申し上げる。そして、今後も組踊や琉球芸能、文芸に関わる講座を積極的に開催していきたい。

平成 31 年度文化講座概要・講演録

第 11 回　宮城能鳳先生「私と組踊」

話し手：宮城能鳳
聞き手：鈴木耕太

能：宮城能鳳
鈴：鈴木耕太

鈴　「私と組踊」というタイトルで、鈴木がお話を伺うという企画です。対談形式は初めてなもんで。私も何分緊張しておりますが、一番緊張しているのは能鳳先生だと思いますので、皆さん温かく拍手をいただければと思います。

（会場拍手）

鈴　皆さん、今日はレジュメはメモというような形でお配りしているものがあると思います。そちらにですね、能鳳先生の簡単な短いプロフィールというか、ご経歴を書かせていただいております。軽く読み上げますと、宮城能鳳先生は 1938 年のお生まれで、ご出身は旧佐敷村の小谷というところでございます。1961 年、昭和 36 年に宮城能造先生の門を叩いてご入門されます。こちら県立芸術大学との関わりはですね、1990 年に本学の教授として組踊をご指導なされてまして、退職後は 2004 年に客員教授、そして 2007 年には名誉教授にご就任されて、現在に至ります。芸能界の活動としては、大きなところからいきますと、2004 年に開場した国立劇場おきなわ、2005 年からは、組踊の研修生というのがスタートします。そちらの立方の講師、主任講師としてお勤めになられております。現在も、毎週ですよね、毎週国立劇場に行って、指導を熱心になされております。それから、皆さんご存じのとおりですが、2006 年に沖縄県からとしては初めてですね。立方としてですね、組踊立方、舞踊もあって、芸能の立方としては初めて、人間国宝となります。人間国宝というのは、重要無形文化財の各個認定といって、お一人の方に認定する場合を各個認定、通称人間国宝と言っております。そのあと 2009 年に琉球舞踊、立方・地謡合わせて始めは 39 名、ですかね、総合認定というかたちで、こちらも重要無形文化財に指定されました。舞踊の総合認定というのも、これも実は日本が始まって初めてのことで。琉球舞踊、日本舞踊とかは、まだ実は重要無形文化財になってない、というわけです。す

ごいですよ、沖縄って。なぜなのかというのはまた別の回にお話しします。そして、2015年からは琉球舞踊保存会の会長さんを務めておりまして、現在に至ります。あとは、皆さんの記憶に新しいのは2018年に日本芸術院賞を県内で初めて受賞されました。受賞経歴だけでももうこの一枚では足りないくらいですので、ちょっとまとめさせていただきました。今日はですね、こういうかたちでお話をするというのもほぼない、かなりレアなものですので、今日はマニアの方も集まってると思います。今日は先生のお話を聞いて、これまでの先生の芸能のお話と、それから組踊にどうやって向き合ってきたのか、そして最後は、若い芸能の方々がいらっしゃいますので、その方々に対してのメッセージなども含めながらいきたいと思います。前半はインタビュー形式、後半は、先生から貴重なお写真を預かっております。そのお写真を見ながら、この時はこうだったよ、ああだったよ、というような話を聞いていきたいと思っておりますので、90分よろしくお願いいたします。

実はこれ、一回、お話をうかがうためにリハーサルじゃないんですけど、やってるんですけど、もう本当に面白い話がいっぱいありまして。今日はほんとに、私わくわくしております。じゃあ先生、よろしくお願いいたします。

能　座ったままで？

鈴　もちろんです。よろしくお願いいたします。先生立ったらギャラが２倍になりますから（笑）

（会場笑）

能　ただいまご紹介いただきました、宮城能鳳でございます。本日はまた本当にご多忙の中を、こんなにたくさんの方々がおいでいただきまして、ありがとうございます。やっぱり実演家でありますんで、喋るのはもう苦手でございます。けれども、鈴木先生のお話の進め方で何とかやっていけるんじゃないかなと思っておりますので、ひとつよろしくお願いいたします。

（会場拍手）

鈴　はい、ということで、まず初めにおうかがいしたのは、琉球芸能との出会いについて、ちょっとお話伺いたいと思うんですけど、まあ、ご出身の話、幼少の頃からですね。

能　先ほどもご紹介ありましたように、私は生まれが旧佐敷村、現在の南城市の小谷というところになります。「こたに」と書いて「おこく」と読みますけれども、そちらで生まれました。私の父が徳村磯輝といいますけども、琉球古典音楽をやっておりまして、少々がてら、琉球舞踊の嗜みもございましてですね、幼少の頃から父の膝元で音を聞いたり、あるいはちょっと歌ってごらんということで書道も舞踊も教わったりしたんですけともね、そうしているうちに、父の友人でありますところの、玉城源三さんという方が、私のうちによく遊びにみえたんです。父とは三線のお手合わせをよくなさってですね、その合間合間に、玉城さんは舞踊も教えておられたんですね、で、ついでに教えてもらった方がいいじゃないかと、たってお願いしなさいよということでですね、舞踊を教えられることになりまして。いろいろ、若衆踊りから、二才踊り、女踊り、いろいろ教えてもらいまし

た。まだ中学行ったばかりですのでね、四季口説からかぎやで風、あるいは女踊りは、浜千鳥とか加那よーとかですね。花風あたりも教わりましたね。そうこうしておるうちにですね、やっぱり琉球舞踊も好きではあったんですけれども、高校行ってからですね、ピアノとか声楽を勉強するようになりましてね。というのは、音楽大学に行きたかったんですよ。

鈴　音大の方に、

能　ええ、音大の方に。歌が好きでしたんで。専門の先生方にお習いして、ピアノも、それから声楽もですね、それが、一生懸命ピアノを勉強しておりましたけれども、教本の、３部ありますけれども、バイエル、ツェルニー、ソナチネというやつですね、それをほとんど弾きこなせるまでになってましたけどもね。

鈴　先生、こちらにピアノがありますけど。

（会場笑）

鈴　冗談です（笑）

能　この60年あまりも手放してますんで、もうほんとに素人になっておりますけども。その時に、高校２年の頃ですかね、母親を亡くしまして。

鈴　はい。

能　母が家計をほとんど見てましたんでね。もう、母がいなければ、音大まで行くお金はないということで、諦めまして、就職したんです。琉球政府にですね、琉球政府に、ちょうど西銘順治先生が経済局長をやっておられた頃ですけどもね。その先生のところに、よく決済をもらいに伺ったりして。仕事をやっておりました。そうこうしているうちにですね、RBC合唱団というのが募集してましたんでね、もう舞踊の事はしばらく忘れかけてですね、この、コーラス、音大のなにが諦めきれなかったんでしょうかね、合唱団に入って歌を歌ったりしておりましたけれども。その帰り道、帰り道はやっぱりあれですね、夜遅くなったりしてですね、この月夜の晩などは、田舎だからできたんかなあと思いますのが、こねり手の練習ですね。これを歩きながら、月夜の晩、アスファルトにこれを写してですね、お稽古して歩きながら。それが今では考えられないんですね。あの頃の交通量と言いますか、車が一台来たら何分も来ないような状態の時代でしたからね。それでこねり手やったり、あるいは、組踊の唱えですね、唱えを大声で唱えたり、歌を歌ったりしてですね、バスを降りたらもう３、４キロくらいうちまで距離があるんですけれども。

鈴　小谷ですから、坂道上がっていく……

能　そうです。

鈴　感じですよねえ。

能　はい。そういう風に過ごした時代でしたねえ。

鈴　じゃあもしかしたらあれですね。お母さまがお元気でいらっしゃったら、人間国宝・宮城能鳳ではなくて、

能　そうですね、私の人生変わってたと思いますね。

鈴　音楽学部は音楽学部でも、琉球芸能専攻の教授じゃなくて、ピアノの方の教授をやってたかもしれないですね。
能　そうですね。
鈴　はー、すごい、すごいですよねえ。
能　（笑）
鈴　この話、僕は初めて聞いてびっくりしました。やっぱり、先生の音感みたいなところは、やっぱそこらへんからあるのかな、と。唱えなんかの音程とか。
能　洋楽を勉強して、何かこう、肥やしになったのは、腹式呼吸ですね。
鈴　ほお。
能　発声はご存じのように、琉球音楽と全然違いますので。しかし腹式呼吸だけは、だいぶ、ためになりました。組踊に活かせるようになりましたね。
鈴　面白いですねえ。じゃあちょっと話を、もうちょっとお父様の方の話に戻しまして。
能　はい。
鈴　お父様、三線を弾かれていたということでしたけれども。小谷の方ではどのような形で、活動されてましたか？
能　はい、そうですね、村踊りだとか、あるいはお祝い事がありますとね、お声がかかりましてね、どうしても地謡をやってくれとか、あるいは、２、３、踊りもやってくれということで、私も一緒に行きましてね、よく踊ったりしたんですね。それが、自分の集落だけじゃなしに、近くの地域の方々からもよく声がかかりましてね、出向いていった覚えがあります。
鈴　貴重なお話ですね。その頃、まさか人間国宝になるとは思わない、中学生の能鳳先生の踊りを、地域の人たちに、
能　そうですねえ。
鈴　ミークヮッチー（笑）
能　それでいてですね、やっぱり、舞踊をやりに、玉城源三さんに舞踊を習いにいったりするときになるとですね、やっぱり田舎ではまだ、本流も男性芸であったということは皆さんご存じないわけです。王朝時代は男性でやってたんだという意識がないもんですからね、男の人が芸能や舞踊やって何になるんだ、何してるんだというようなね、特別な、そういう目で見られた風潮がありましたね。
鈴　もう戦後ですもんね、先生、お生まれは戦前ですけれども、戦争の時期は疎開をされていて。
能　そうです。熊本県。ですから沖縄の事情は一切知らないんですよ。はい。
鈴　で、戦後すぐ、お戻りになられて。
能　はい、帰ってきました。
鈴　その頃の沖縄っていうのは、もう琉球舞踊界は、大きな先生方は男性の先生方ですけど、踊って活躍されていたのは、女性が、

能　いやあ、多いですねえ。

鈴　大部分、という時代でした。

能　官営の、松・竹・梅の三劇団が、民政府で、何されたでしょう。それが地方に巡業して参った時にですね、そこで見た、私は本式の初めての踊り見たのが、女形で舞う、花風？花風の、ウシンチー姿がですね、とても印象に残って、今でも。思いましたね。

鈴　踊られていた方はどなたですか？そこまではちょっと……

能　お名前はちょっと忘れておりますけれども、男の方でしたね。

鈴　うーん。三劇団が、官営三劇団ができた頃、すぐですか。じゃあ戦後がおわって２年目とかですかね。

能　そうですね。

鈴　その頃だったかと、認識しておりますが。で、そうやって琉球芸能を地元でお勉強されて、で、声楽を勉強されて、合唱団に入って、で、青年・宮城能鳳が、宮城能造先生のところに、どういう経緯で習いに行ったのか、というお話ですね。

能　そうですね。合唱団に通って勉強している頃にですね、たまたま沖縄タイムスさんの芸能祭がございましてね。で、大先生方が出られる特別出演の演目ということで、うちの師匠と親泊興照のコンビで、加那よー天川。それを拝見したときに、もう身震いするほどの感動をしましてね、ここでやはり、私は舞踊をやってみようかという気になりましてね。

鈴　名人芸ですね。

能　そうですね。

鈴　初代宮城能造と、親泊興照の加那よー天川は、私が記憶しているのは、大正 14 年でしたっけ、天覧舞踊ということで、秩父宮がいらしたときにも上演していた演目で。それを、戦後の 1955 年から始まったタイムスの芸術祭のときにやられていたと。

能　60 年、の初期でしたかね、拝見したのは。

鈴　で、それを見て、あの頃は松尾でしたっけ？先生の道場、宮城能造先生の道場に行かれたわけですね。すぐに行かれたんですか？

能　それがですね、もう田舎から出てきた田舎者ですから、もうほんとに大先生の門を叩くというのは怖くてですね。何度も何度も行っては、先生の「どうぞお入りください」のお声を聞きましたらびっくりしてですね、また逃げて行ってですね（笑）

（会場笑）

能　引き返して。これが２、３回ございましてね。そして最後は、たまたま、自分の誕生日の時に、もう今日の機会を逃したら自分は先生の道場を伺うことができないと、意を決してですね、門を叩いたんですね。

鈴　へえ～。

能　入っていきましたら、先生が「どうぞどうぞ」ということでしたけどね。

鈴　見た目のイメージで怖がっていた能造先生は、中にはいるとどうでしたか？

能　ええ、もう、ご承知のように先生はお優しい方、普段はね。そういうお顔立ちをしてらっしゃるんで、もう私は取り越し苦労といいますか、考え過ぎていたんだなあということでですね、お話うかがって、何とか入門を許されたような感じでしたけれども。先生が、ちょっとお稽古に入る前に、ちょっと私の印象をおっしゃってましたけれども、あの頃は今以上に痩せてですね、46キロくらいしかなかったんで。先生のおっしゃったことが、「こんなか弱い青年が、芸能界の荒波を乗り越えることができるかな、大丈夫かなと思ったよ」と、後ほどおっしゃってました。

鈴　そうなんですねえ。じゃあもう、忘れもしないですね。もうこの、昭和36年のご自分の誕生日にご入門されたことは。

能　そうです。

鈴　誕生日が来るとこれで芸歴何年目、入門何年目というのが分かると。

能　そうですね。

鈴　いい時に入られましたね。はじめ、能造先生の教え方というか、能造先生からどのような形で、舞踊などは習いましたか？

能　やはりあれですね、基本のかぎやで風からですけれども、かぎやで風でも、歩みだけでももう随分時間かけて、厳しく教わりましたね。

鈴　舞踊を教わりながら、組踊も同時に、

能　そうです。

鈴　能造先生から。

能　はい。あの当時はまだ、国指定になるまでは、各研究所・流派単位でですね、先生方教えておられたんで、組踊もいろいろ教わりまして。

鈴　じゃあ、だんだん組踊の話になってきましたので、先生が組踊をちょうど習いはじめのころというか、ご入門された頃の、琉球芸能の現状というか、組踊の現状はどんな感じでしたか？役者さんであったり。

能　そうですね。その頃は女性の舞踊家が多くやってる時代ですね。特に女の役だとか若衆の役などは女性がやってました。ですから私はその相方の男の役をですね、組踊五番の中でもほとんど男の役をやらせていただきました。

鈴　これは時代としてはとても意外なことですよね。おそらく芸能を通して能鳳先生をご存じの方は、女形としてのイメージが非常に強いと思うんですけど、男の役をやっていた時代が多かった、初めの頃は、ということですね。

能　そうですね、はい。ほとんど今一線で、国指定の保持者になっておられる方々、女性の皆さんを相手にですね、自分は男の役をずっとやって参りました。

鈴　私の印象は、若松の役を玉城節子先生がやってる印象が非常に、昔の写真見ると多いんですよね。だから、そういう感じで。

能　そうです。

能　主に、能造先生傘下の弟子たちでやってたのが主ですけどもね、例えば私の先輩であ

られる宮城能弥さんていう、能弥さんは本名キナカツコさん、それとか、娘さんの能桂さん、その方々と一緒に、この五番はほとんど、私が男の役で。

鈴　お稽古されていた。

能　はい。

鈴　ちなみに先生の初舞台の役は何だったんでしょうか？

能　ああ、その中でですね、朝薫の作品の中の、女物狂でございますね。

鈴　はい。

能　それのね、小僧２の役なんですよ。

鈴　小僧２の役（笑）

能　お触書を読み上げる難しい役ですね。

鈴　「ウビー」ってやつですね。

能　そうです。はい。

鈴　「ワラビ、トゥシナナツィ」とか言って、最後は候文を読む役で、組踊ではこの作品のみで、難しい。

能　口調がね、ちょっと独特な口調で早いもんですから、随分しごかれましたよ。といいますのが、ご一緒した先生方が、玉城盛義先生、それから親泊興照先生、それから宇根伸三郎先生、それから宮城美能留先生ですね。その中で、宇根先生も小僧でしたけれども、小僧１は宇根先生がなさって、２の方ですから、２の方が、このお触書の「ウビー」ってやつを唱える役なんですね。で、先生方の初めての共演ですので、あんな大先生方と初めて舞台に立つわけですから、もう極度の緊張感でね、どういうようにやったか覚えてないくらいですよ。

鈴　（笑）普通ならば伸三郎先生の方が小僧２をやって、どちらかといったら小僧１の方を若手の方にしそうな気がしますけれども。

能　ええ。そうなんですよね。なんか難しい役を当てられてですね、随分しごかれたのを覚えています。

鈴　先生、その頃のお稽古というのは、どのような形でやってましたか？まあもちろん流派の中での組踊のお稽古もあったと思うんですけれども、今おっしゃったような先生方とのお稽古は。

能　そうですね。そういうのはたまにでしたね。そんなにはなかったんですが、ただ、国指定なるまでも同じですけれども、これは、保持者の先生方がですね、稽古場もない時代ですから、国指定でありながらですね、お稽古場がないんですけれども、ある何年間かは、照喜名朝一先生のところの研究所をお借りして、そこにですね、指導なさる先生方をお招きして、やったんですが、毎年輪番制で、一年ごとに交代でですね、先生方に教えていただきました。

鈴　じゃあ、主となるご指導される先生が、毎年変わると。

能　そうです。

鈴　眞境名由康先生だったり、島袋光裕先生だとか。
能　はい。
鈴　そういったかたちで。じゃあ、後は、金武良章先生も。
能　はい。
鈴　ということは、ほとんど、明治・大正の芝居小屋、それから、教えるプロとして活躍なさっていた大きな先生方から、手を学ぶと。
能　そうですね。はい。
能　先生方の指導がもう厳しくてですね。そして、その時代はご承知のように、映像資料のない時代でしょう。今はおんなじそういう映像がありますんでねえ、あまり先生のところに頻繁に通うこともないんでしょうけども、その頃は映像が一切ないですから、先生方が一生懸命ご指導なさるその一挙手一投足をですね、もうまばたきもしないくらい一生懸命見て、覚えたような、感じでございますね。
鈴　あ、どうぞ、先生、お水を飲まれながら、湿らせながら。ちょっと今の稽古のようす、（学生に向かって）どうですか、若い人たち。
（会場笑）
鈴　今の話の流れでちょっと感じたのは、一挙手一投足まばたきもせずにご覧になったということは、先生方がまずお立ちになってるということですよね。
能　そうです。自らお立ちになってね、教えられるもんだから、そういう、よそ見するなんてないんですよ。
鈴　あれなんですか？立ち回りとかじゃなくて、先に先生方が。
能　はい。
鈴　立って。このセリフはこんな、立ち方は、動き方は、と。
能　はい。立ち居振る舞いもすべてですね。立って教えられたんですよ。
鈴　これは貴重ですよね。やっぱり映像がないということも大事だと思いますけど、当時実際に組踊に、舞台に立たれていた先生方がまず立って若い人たちに見せて、それから実際立ってるところを指導すると、いうようなかたちですね。今はもうちょっと違うわけですよね。
能　今はもうそうですね、若い人たちはまずは映像を見て、あるいは見とけというような教え方をされる方も多いです（笑）
（会場笑）
鈴　ある意味それも厳しい指導ですよね。次お稽古に出て、できてなかったら何でできてないんだと言えると（笑）いえるかたちですけども。まあ時代の流れもありますけれども、そういった意味では、私みたいな琉球芸能のマニアからすると非常にいい環境で、あの名優たちの息遣いを感じながらお稽古に励んでらっしゃった、ということですね。ある意味、琉球芸能を研究している我々にとっては、戦前のお話とか、いろんな資料から見えることはたくさんあるんですけど、やっぱりこう、実演側で「ほんとはこうだったんだよ」とい

う、特にもう、戦後から復帰前、そして復帰後から現在というのはあまり見えない、見られないことなので、非常に貴重なお話だなと感じました。ありがとうございます。

鈴　ちょっと話題を少し変えますけれども、組踊が国の重要無形文化財になるのは1972年、復帰のその日になるんですよね、5月15日に。その復帰の前と後では、組踊の上演の数というのはどういった感じで変わっていきましたか？

能　やっぱり、指定されたということで、指定後はもう随分数多くやるようになりました。まずは、後継者を養成しなきゃいかんですからね。大きいものは、毎年後継者養成事業、それの成果発表会というのがありまして、それが一題だけじゃなしに、二題くらいやりましたからね。もう全員若い人たち男性は総がかりで出演するって形で勉強しましてね。

鈴　じゃあ、指定を受けたあとから、女形というような考え方がまた再認識されたというイメージでいいですか？

能　そうですね。指定されるまでは先程も申し上げたように、女性を相手にほとんど男の役を演じましたけれども、指定されたときにですね、指定要件の中に、ひとつ謳われているのが、「女形であること」と謳われてますんでね、それに準じて結局先生方は、女形を早く養成しなきゃいかんじゃないかという意識がすごく働いておられたんでしょうね。随分もう、私なども「女形、女形やれ」といって、たえず女形の勉強ばっかりさせられた覚えがあります。

鈴　当時だと、もちろん初代の親泊興照先生もお元気ですし、それから宮城能造先生ももちろん。で、女形と言えばこのお二方がずっと引っ張ってらっしゃった時代かと思うんですけれども。

能　それでね、国立劇場おきなわを建設するにあたっても、いろんな委員会に出てました時にね、やはりいろんな研究者の先生方がお集まりですんで、その中の意見として、女形、あるいは若衆をこなせる人が育たなければ、もう女性の皆さんにその役は当てたらどうかとまで、ご意見が出ましてね。

鈴　じゃあ、やっぱり復帰前はそうやっていたからこそっていうことですね。

能　そうですね。それで私は、ちょっと待ってくださいと。私は10年足らずして育ててみせますと、大きく何して出ましてね。そう申し上げて。

鈴　はい。それは2004年の国立劇場おきなわが建つ前の会議ですね。

能　そうですね。

鈴　そう言って、今2019年、もうだいぶ様変わりしたというような感じだと、勝手に一ファンとして見続けてる人間としては、本当に若い男性が育ったなと。

能　育ちましたね。

鈴　すごいことですねえ。ちょっと先生、ちょっと最近の話になりすぎているんで、もう少しタイムスリップ、昔の話にまた戻ります。すみません、あっち行ったりこっち行ったりしますけれども。じゃあ、組踊を習った各師匠のお話をちょっと伺いたいなと。印象的なお話。まずは、親泊興照先生の面白い話でも聞きましょうかね。どうでしたか、親泊先

生は。

能　まあ、面白いと言いますかねえ、先生の特徴、唱えの特徴と言いますかね、同じ女形でも、やられる先生でも、うちの能造師匠と興照先生の唱えがちょっと、何と言いますかね、語尾の落とし方などが少々違うんですね。ですから私などは、やっぱり両方の先生方にお習いしましたので、こういうところは興照先生の唱えがいいなあと、あるいは、例えばセリフの、何と言いますかね、はっきりセリフを唱えるものについては能造の方がいいのかなとか、色々比べましてね。そういう研究しながら習得した覚えがございますね。

鈴　面白いですね、これは、ここにいらっしゃる方で琉球芸能やってる方って、多分少ないと思って、前提でお話しますけれども、基本的に琉球舞踊っていうのはやっぱり流派があって、自分の師匠の芸をずっと継いでいって、やっぱり再現すること、その再現性に重きが置かれているんですけど、組踊は実はそうじゃなくて、わりかし自由なんですよ。先生のお話聞くように、一人一人の先生方の演出もまた違うんですよね。

能　そうですね、それも違いますね。

鈴　だから、僕がこの話をお伺いしてた時に一番びっくりしたのは、眞境名先生やもちろん宮城能造先生というような先生方から習っていて、金武良章先生からも習っているというのは、非常に面白くてですね。

能　で、若手の保持者の先生方でも、まあ今そういう機会ないもんですから、お一人の自分の系列の、系統の先生について学んだというのが多いんですけどね。

鈴　今の若い人たちは。

能　我々の時代は、先生方、いろんな先生方にお習いする機会があったわけです。ですから、手水の縁でも、うちの師匠の型っていうのがありますから。やり方。金武良章先生のやり方、いろいろ両方お習いして。二童敵討もしてますね。そういう型をお習いしたというのが、ございます。

鈴　若い時にお習いしたときの、戸惑いっていうのはなかったですか？

能　まあ、多少この、二童の踊りとか、こういうのは多少違いますからね。あるいは、考え方でしょうかね、二童はまだ若い青年だから、若衆なんだから、あまり大声出しちゃいかんとかね。

鈴　はいはいはい、唱えの時にも。

能　そうなんですよ。で、うちの師匠あたりは、やっぱり劇団、演劇のお芝居がご専門であられたわけだから、マイクのない舞台に立って演技をやってこられたんで、地声で通さなきゃっていう考えがありますんでね、長年の。大きな声で、何の役でも「大きな声でちゃんとはっきりセリフは唱えなさい」と教わったんですよ。

鈴　だけど金武先生はそうではなくて？

能　なかったですね。若衆などはあまり大きな声出さないと。出すなと。

鈴　それは方言で、「ガーアビー」みたいな感じで言われたんですか？

能　いや、「ナマドチューサンドー」と。

鈴　ああ、強いと。

能　ナーチャットウガービーと。

鈴　あーはいはい。

能　という感じのね、教え方されましたね。

鈴　面白いですね。だから、この金武先生の手とか、教わり方、指導の仕方をきいて、そしてやっぱり自分の師匠からも聞いて。で、組踊と言えばというか、やっぱり眞境名先生だと思うんですけれども。保存会の流れに引張られて。眞境名先生とのお話を、お稽古されていた時のお話をちょっとお伺いしたいんですけれども。

能　やっぱり眞境名先生も、セリフはね、大きな声で。やっぱり劇団のご出身でしょう、長年の。それだと思いますがね。一字一句、最後の語尾一字までもはっきり言うように、セリフは唱えなさいという感じですね。そういう教え方なさってましたね。

鈴　眞境名先生はずっとこう、組踊を創作したりとか、その時期は人盗人をまた1960年代ですかねえ、沖縄タイムスですか、芸術祭の方で、いろんなものを一等賞つけてやる時期ありましたよね、舞踊だけじゃなくて、音楽だけじゃなくて、演劇とか、芝居とか、それにもお出になられていたと思うんですけれども。その頃っていうのは、眞境名先生が人盗人を作ってまた発表してみたり、玉城盛義先生が中城落城をやってみたりとか。実際そのような時代で、お芝居っぽい組踊、新作もやりながら、古典も教えていらっしゃったという。

能　そうですね。眞境名先生あたりは、仇討物がね、得意でおられたんですけれども、二童敵討はもちろん、それから仇討物の大川敵討、長編の、そういったものとかですね、人盗人あたりもですね、ご自分でほんとに立って踊り教えてもらいましたよ。

鈴　役を、先生がなさる役を。

能　そうです。例えば姉妹敵討の、姉妹の長刀の舞とかですね、そういうものもご自身で立たれてね、こうやるんだ、ああやるんだ、と教えていただきました。

鈴　貴重なご体験ですねえ。ありがとうございます。では、だんだん時間も時間なんで、少しずつ最近の話に寄せていきたいなあと思うんですが。実際先生なんかがお立ちになられてね、芸能を組踊の立方としてやられていたときに、心に残った舞台というものがありましたらぜひ教えていただきたいんですが。

能　そうですねえ。２つほどご紹介いたしますけれども。一つはですね、ご存じのように組踊の中に70編80編くらいですか？

鈴　70作くらいですねえ。

能　ありますよねえ。その中で一番長編ものと言われる、大川敵討っていうのがございます。大体２時間半くらいかかりますがね。その中の、主人公である乙樽。乙樽の役ですがね、この役はもう最初っから出るんですよ。始まった析が入りましたら。最後の最後までこの役はずーっと出っ放しなんですけどね。その中で、糺の場という場面がございます。一番これが山場ですけれども。その中で、場面で、まるまる40分間座ったままです

ね、動かずに。あの人ともこの人ともずいぶん掛け合いでセリフ、掛け合いするところがございます。そこがですね、動かずにずっと座ったままでのセリフ40分やるというのが、ちょっときついなあというのが、すごく印象に残っております。

鈴　やっぱりこの乙樽をやるときの、女性の唱えと、やっぱり、皆さんが一番見たことがあると思うんですけど、執心鐘入の宿の女の唱えとはまた違った、どのような感じで唱えますか？

能　そうですね、ご存じのように、女性だてらに単身敵地に乗り込んでいくわけですよね、仇討する気で。その気持ちで敵地に行って、仇である谷茶の按司とのやり取り、色気を振りまいて、討ち亡ぼすという、最後にはね。そういう芸をやらんといかんわけですから、それなりの、やっぱりその精神的な強さとか、あるいは色香、あまり振りまいちゃ、組踊で色気出しちゃいけないんですけれども、それなりの誘いと言いますかね、相手をね、そういう気持ちを持ってセリフを唱えるという。執心鐘入の場合は、やっぱりあれは愛、純愛のものですから、全然唱え口調は違うわけですね。

鈴　全然違うと言われても、素人には多分まったく一緒だと思うんですけれども、このちょっとした心の表現というか、それを唱えの、同じメロディーですよね、唱えのメロディーは。それに乗せていって表現していく。そういうのがやっぱり組踊の。

能　そうですね、難しいところであり、また聞きどころですね。そういうのを吟使いと言いますが、唱えのね、抑揚をつけて唱える。それの、やっぱり語尾の落とし方だとかそういうものが役柄によって違う、場面によって違うんですね。そこらへんが組踊のやっぱり魅力の一つじゃないでしょうかね。

鈴　はい。ありがとうございます。

能　謡ですと同じような感じに聞こえますよね、まったく。

鈴　この気持ちが、気持ちの持ちようというか入れようで変わってくると。

能　変わってきますね。

鈴　それがやっぱりうまく出せる、出せた時がやっぱりいい舞台と。

能　そうですね。

鈴　で、先生も一つの、忘れられない舞台というのは。

能　これがですね、私がよく朝薫の五番の中で多く演じさせていただいてます、執心鐘入の宿の女という役柄におけるものですけれども。後半、自分の思いが叶えられなくなって、若松へのね、鬼女に変化しますよね。その鬼女に変化するところで、座主、小僧たちとの立ち回りがありますね。そこにおける出来事なんですよ。ちょうど、昭和60年頃ですかね、随分昔の話ですけれども、太鼓方の人間国宝でいらした島袋光史先生と私との共演で、第一回国立文楽劇場における舞台でした。そこにですね、この立ち回りのところで、お互いにですね、もうほんとに、どういう風に光史先生も太鼓を打ったのか、私もどういう風に座主との立ち回りしたのかですね、分からないほど無心に演じたといいますかね、無我の境地とかそういう言葉もよくお聞きになると思いますが、そんなもんかなあっ

て、それが。そういう貴重な体験をしたのが、この執心鐘入における鬼女の立ち回りのことですね。

鈴　昭和60年の文楽劇場の第一回琉球芸能公演。皆さん、国立劇場おきなわには多分ビデオないと思いますんで、文楽劇場に問い合わせてぜひ映像を見ていただきたいと（笑）僕も見たいなと思っておりますけど。

能　それがね、そのとき、体調がね、上々じゃないんですよ、私は。あの時は、東京の国立劇場で執心鐘入と銘苅子を上演しましてね、その足で大阪の文楽劇場に持って行ったんですよ。

鈴　ああ、じゃあ公演続きなわけですね。

能　続いて。で、風邪もひいてですね、私。

鈴　え！

能　点滴もして、行ったような状況でしたけども。

鈴　まさか点滴を打ちながら、持ちながら出て……（笑）

能　（笑）思わぬことにですね、私は銘苅子は天女の役でしたけども、執心鐘入は若松が当てられていたんですよ。最初は若松。それが、宿の女の方が、一週間ほど前に風邪ひいて舞台を降りちゃったんですね。

鈴　あーもう出られないということで。

能　私も風邪を何して頑張ってるのに……こんな簡単に……

（会場笑）

鈴　まあ先に言った人が早かったという（笑）

能　ええ。で、宿の女が回ってきたんですよ。で、一週間くらいしかないからお稽古もできない状況で、そのまま行ったんですね。そういう状況でやったにも関わらず、東京は何とかうまくこなしまして、その足で大阪の文楽劇場へ行きましてね。こういった経験やったんですけども、やっぱりあれですね、舞台における集中力と、何と言いますかねえ、無心で演じたという、その、申し上げたいのは、何でそれが今までにない経験かと言いますとね、演技が終わりまして上手と下手から、私は下手、光史先生は上手からこう……控室に。私は下手からこういう風に控室に行きましたらね、楽屋の控室の前で、無言のうちに手を差し伸べられて握手されたんですよ。だからね、それが言葉ないんですよね。それが、光史先生も同じようなことを感じられた、無心に演じられたというね、その証じゃなかったかなあと。で、そこまでは良かったんですよ、私も。それは終わりましたけども、もう一つは、ホテルに戻りましたらね、結局風邪ひいてるものですから、夜中から咳が酷くなったんですよ。

鈴　先生、舞台中の咳はどうだったんですか？

能　全然ないんですよ。

鈴　は！そうですよね。

能　やってもちょっと揺れるくらい。身体は。

鈴　へえ。

能　前後に小刻みに揺れてるのは分かりました。立ち回りからもう全然知りませんでしたからね、もうほんとに無心でやったといいますかね、で、ホテルに帰ってきて、もうあまりにも胸が、咳が酷すぎて胸が痛いんですよ。その翌日は沖縄にすぐ帰ってきましたら病院行ったんですね。病院の先生に叱られまして、もう保健手帳は本名でしか出しませんでしょう？

鈴　ああ、そうですね（笑）

能　ですから、先生は僕をご存じないわけですよ、組踊や舞踊やってるっていうの。どんな仕事してるんだ、と。

鈴　徳村さんと（笑）

能　はい。仕事で何かあったんですかねえ、と。君の肋骨にヒビが入ってるじゃないか、と。

鈴　ええー！

能　それで痛かったんですね。そういう状況であっても舞台をこなしたというのが、なおさら無心に。あるいは長年培った精神力と言いますかね、それを強く感じた舞台でございましたね。

鈴　へえ……。（学生に向かって）〇〇君聞いているか？

（会場笑）

鈴　（笑）組踊立方の大学一年生がいるので。すごいですね、でも。ほんとに、もうほんとに無心でやられているという、まさに。

能　そうですねえ。

鈴　咳は出ないけれども、帰って緊張の糸がぷつっと、というかこういう無心の糸がぷつっと切れると、現実に戻ると。

能　そうですねえ。すぐに戻ると、結局痛みだして。咳込んで。

鈴　すごいですねえ。僕らは気が付いたときというか、物心、という言い方は変ですが、組踊を見出したころは、やっぱり今から20数年前ですけども、もう、いつも女形というと、重要な場面では、立方として能鳳先生が立たれていて。で、男の役は、今の眞境名正憲先生であったりとか、島袋光晴先生だったりとかっていう、ずっと、時代でいうと、東町会館があったころですねえ。いつも保存会の発表は、東町会館で。座るとどこからともなく飴玉がまわってくる（笑）素敵な会館があったんですけれども、あそこでよく見ていて、先生方の演技を見ていて、いわゆるあの黄金期をずっと見させていただいたんですが、その裏側にはそういうお話があったんだなあと思って感慨深くなると共にですよ、今はどちらかと言うと先生は指導者の側によく立たれて演出とかをしておられますが、若い人たちに対してどのような感じで、どのようなかたちで、先生の組踊を教えてらっしゃるんですか？

能　教え方ですか？

鈴　教え方というか、どういう気持ちで、どれが大事だよといって教えてらっしゃいます

か？

能　やっぱり、話ちょっと戻りますけども、先程の貴重な体験談というのをね、光史先生も事あるごとに若手の皆さんに、若い人たちに、このこういう貴重な体験談をね、お話なさっていたということでした。で、私も、今どういうふうに教えるかということについてですね、それに関連して、こういう風なこともあったんだということもですね、私も若い人に話す機会を持つようにしておりますけどね。やっぱり指導っていいますとですね、やっぱり何でもそうですが、組踊に限らず、基本っていうのが一番大事ですからね。組踊の基本である、組踊の素晴らしい演者となるには、骨格であるところの舞踊、琉球舞踊、それとセリフ、唱えですね、それを厳しく教えるようにしてますね、身につくように。というのが、舞踊も、やっぱり歩みから姿勢、ミヂチ（目付）だとか、この基本的なもの、それをしっかり身につけるとね。それから唱えは各役々、ご存じのように、その唱え方があるわけですから、それもしっかり学ぶようにですね。で、琉球古典語の発音、まず。それも発音がね、若い人たちは言えないのが多いんですよ。

鈴　例えば……？

能　例えば、ヰとかヲゥとかね。

鈴　ワ行音のヰとかヲゥとか。

能　五十音から消えてますよね。しかしそれが古典語には出て、これが組踊の発音なんですよ。それから、二文字続けてるクヮとかクェ、クィとかね、声の事クィと言いますよね。

鈴　そうですね。

能　あるいは、なになにやらでクヮ、グヮ、

鈴　クヮとがグヮとか、グィ、

能　こういったのが若手がちょっと言いづらそう、言えないんですよ。なんとかなんとか、何度も言わすことによってやっと言えるようになってますがね。そういうところを厳しく教えるようにしてますね。まず組踊のそれは重要な要素の一つですから、骨格ですからね。

鈴　はい。（学生の方を振り返って）書いてますね、大丈夫です。今見たらちゃんと書いてます。

能　（笑）

（会場笑）

鈴　話をちょっと芸大時代に戻そうかと思いますが、先生が芸大で 1990 年から教鞭を取られていましたけれども、その芸大での思い出で、何か芸大での教職時代にですね、非常に印象に残ることとか、こんなことやっていましたよというのがあれば教えていただきたいと。

能　そうですね、ご存じのように琉球芸能が、このような最高学府で教育として取り上げられていくとは夢にも思いませんでしたからね、私どもそれに携わる者も、教歴のない連中があたったわけですからね、教歴のない私どもがあたってきたわけですんで、最初の

10年間というのは、大変な苦労をしました。例えば、同じ伝統芸能でも大和の芸能とうちなーの組踊・琉球舞踊というのは全然違うわけですからね、基本的に。邦楽の指導をそのまま活用するわけにいきませんで、そういう判例のない教育をしていかないといけないわけですから、もう10年間っていうのは色んな会議が多く、会議会議でですね、1期2期生は可哀想ですけども（笑）授業を割いて会議をやるという。落ち着くまではね。

鈴　要はカリキュラム自体が、邦楽専攻からスタートしたわけですよね。邦楽という観点から、東京藝大にあるような邦楽。そこで琉球芸能を教えるという。だから、カリキュラムが邦楽カリキュラムの下で琉球芸能をまず教えてみる。そうすると問題が出てくる。それをどんどんどんどん修正しながらやっていくという。今はカリキュラムがきちっとしていて。それはやっぱり先生方のつらい会議の賜物だということで。

能　もう、苦労しました、はい。

鈴　それから、先生がこの大学で教えていらした時に、今は国立劇場おきなわなんかでも上演することになって、ああいや、もう上演し終わってますけども最近、「語り組踊」というのを先生、やってみた、というお話をちょっと小耳に挟んだんですけども。

能　（笑）はい、その通りでございましてね。これ、最初にやったのが、私なんです。これは、野村流音楽協会の、浦添支部の、20周年でしたかね、記念公演ですね、私の方に声かかりまして。「あんたは唱えだけやってくれるか」という声があってですね。

鈴　すごい（笑）すごいオファーですね、唱えだけやってくれんかって。立方の先生捕まえて（笑）

能　はい（笑）それで、最初の頃はどうしようかと思いましたけども、初めてのことですから。で、後ろの方に大勢の三線、お箏、管弦楽器の皆さん携えてですね、それを公演にしたんですよ。私が一人で唱えるであれば、前の方に出て、ちゃんと全役を自分一人でやるには、やっぱりそれらしく、聞いてても感動するようなものにならんといかんじゃないかということでですね、紋付き袴で出まして、最初から5役を自分一人で唱えたのが、「語り組踊」。まあ、ただ唱えとおっしゃっていたけども、語り組踊と申し上げたのは、後々でしたけどもね。それは、ご存じの、こちらの研究所長をなさったような、横道萬里雄先生。

鈴　はい。能楽研究の第一人者ですね。

能　第一人者でしょう。その方が、お忍びでね、ご案内を出してないんだけれど、お忍びで聞きにいらしてですね、見られているということは分かりませんでしたけども、終わってから楽屋にいらして、「能鳳さん、今日のこの組踊のやり方いいから、このかたちで、この形式で、今後も組踊を紹介していくようにしなさい」とおっしゃったんですね。

鈴　へえ！

能　それで私も意を強くしましてね、早速大学院のカリキュラムにも取り入れまして。はい。普及するようになってますね。

鈴　一番初めに先生が浦添支部の舞台でやられたときの演目は、何をされましたか？

能　あ、手水の縁ですね。
鈴　手水の縁の山戸、玉津、志喜屋の大屋子、西掟、そして門番。これを一人で。
能　そうです。
鈴　すごいですよ、ほんとに。
能　そしたらね、唱えがまあまあだったんでしょうね、もうご婦人方、ハンカチを目頭にあててですね、ヒーヒーして泣いてらっしゃるんですよ。
鈴　へえー！
能　だから、初めて私は組踊は聞くものだという言葉をね、実感しました。
鈴　すごいですね。これ先生からこのお話をうかがった後、若手がやってるかというと、やらないですよね。やっぱりできないですよ。
能　こないだだから、劇場でちょっと見たんですけども、ああいう短編のものであれば、１人でやってほしいね。
鈴　おお……
（会場笑）
鈴　すごい、聞いたか○○君。
能　３名か４名、５名の人がやってるものですから、ひっちりびっちりなってね、間がありすぎて。だから何となく、流れがね、思うように聞こえなかったですね。
鈴　一人でやることで、間を自分で作ったりとか、次のセリフに移るときの間を詰めたりだとか、というよな。
能　それがほしいなと。
鈴　ドラマを自分で。
能　はい。
鈴　要は、監督、自分でセルフプロデュースですよね、自分で立方、唱えて自分が監督するんだと。
能　はい。それがほしいなと思いました。それにね、先生。手水の縁は大体１時間くらいでしょ？これ例の２時間半の大川敵討、これをね、ある長編ものであれば、仇討物でもあるし、３名でやりましたけどね。
鈴　え！？（学生に向かって）聞いた？今。大川敵討３人でやったんですか（笑）
能　やりました。
鈴　すごいですね。ちょっとこれ、初耳ですけど今日。
能　私の弟子で亡くなった糸数昌益っていうのがいましたけどね。
鈴　ああ、糸数先生、はい。
能　彼と嘉手苅林一と私とで三名で。全編やりましたよ。
鈴　へええ！これは唱えと、音楽もちゃんと入れて。
能　そうです。
鈴　それでやると、少し短くはなりますよね。立ちがなくなるので。

能　はい、立ち居振る舞いがなくなるので。
鈴　それでも１時間半以上はあるんじゃないですか？
能　そうです、ありますよ。
鈴　（笑）すごいですね。ヒサマンチューして。
能　そうです。あはは（笑）
鈴　（笑）１時間半ヒサマンチューして唱えをする。でもこれはやっぱり組踊だからできることなんじゃないかなと思ったりもするんですよ。唱えを変えることで男性であったり女性であったり、また若かったり年を取ってたりっていうのが唱えだけで表現できるという演劇性。そして、ご自身お一人でやられたというのは基本は、今の若手はそうなんですけども、すべての役を唱え分けられるように稽古するというのが立方の基本。
能　そうですね、若手にそれを望みたいですね。
鈴　それはやっぱり先生がやられてたから、それをやっぱり求めているということですか？
能　そうですね。やればできますということを。
鈴　（笑）
能　やればできます。
（会場笑）
鈴　ということは、立方の人間国宝になるためには、一番のボーダーラインは１人で全部やること。
（会場笑）
鈴　歌三線は除いてでも。えー、というような感じで、楽しくお話をうかがっているのですが、時間もだんだん迫ってまいりましたので、ちょっと先生、ご休憩されながら、機械が立ち上がるのが３分くらいかかりますので、次はちょっと写真を見ながらお話をうかがって行こうと思います。
能　よろしくお願いします。
（会場セッティング）
鈴　今日は先生から貴重なお写真をお預かりしておりますので。実際に先生が立たれた舞台のお写真でございます。はい、見えました。
（写真１）
鈴　これは執心鐘入ですね。これはいつ頃ですか？先生。
能　これは私が､15､６年なります？国立劇場おきなわが開場したのは。開場記念公演だったと思います。
鈴　じゃあもう檜のにおいがプンプンしていた頃の舞台ですね。2004 年に開場しまして。ほんとに檜の、ヒノキで作った舞台だったので、檜舞台、まさに檜舞台で、私も開場記念は見させていただいて覚えているんですけども、幕が開いた瞬間に檜の匂いがぷーんと入ってくるっていうのが非常に印象的で。今はもうしませんけどね。この時は先生、どん

な感じでしたか？踊られていた時の印象は。

能　そうですねえ。これまですべて額縁舞台でほとんど演じてましたからね、出口からやっぱり向こうでスタンバイする時から気持ちが全然違いましたね。

鈴　初めての張り出し舞台。今はもう張り出し舞台が国立劇場おきなわでは普通になってましたけど、それが初めて常設であるという、また変わった緊張感とかも？

能　そうですね、すごく、すごく緊張しましたよ。何度もやっておりますけどね、やっぱり違いましたね。

鈴　まあ１週間前に役が変わってもすぐできる。

能　（笑）

（会場笑）

鈴　それはやっぱり唱えが全部頭に入っていて、稽古をずっとされているからこその。若手にそれをやれという話ではありませんので。達観してらっしゃるのでできること、というお話です。では、次の写真です。

（写真２）

鈴　これは銘苅子の天女の役をやられている時の写真だと思いますが、先生、この天女のお姿、印象的ですが、思い出話などございますか？

能　そうですねえ、これは確か、NHK さんからも放映されたと思いますが、組踊五番をですね、演じたものの中の一つだと思うんですよ。

鈴　ちょっと事前情報ですが、この掛けてるのが、天女の羽衣ですね。これ、先生の宝物という話をちょっとうかがったんですけれども。

能　そうですねえ。またよくお調べになって（笑）

（会場笑）

鈴　いやいや、ある雑誌の後ろに載っておりました。華風っていう（笑）

能　実はですね、これね、能造師匠が十八番としておられた天女の役ですよね。

鈴　そうですね。

能　それをよく能造師匠をはじめ、それから先輩の能さん、この方なんかがよくお使いになっていた羽衣ですけどもね、それを能造師匠が私の第２回独演会でこれをやった時にですね、これを「修理してあんた使いなさい」と。これ籐の骨組みになってますよね。

鈴　ああ、（写真をポイントしながら）籐でこれ。英語で言うとラタンってやつですね。

能　そうですね。で、布地はちょっともう色あせてましたんで、それを取り換えまして、使わせていただいてます。今でもですね。

鈴　能造師匠からずっと使ってる羽衣を、今お使いになられていると。

能　ええ。ですからね、これを演ずるたんびに、師匠から「しっかり頑張れよ」というような叱咤激励のお言葉がね、聞こえてくるような感じがいたしますよ。

鈴　いいですねえ。だからもうこれ文化財に指定しないといけないってやつですね、これね。いや、これほんとに古い物ですよね。能造先生がお使いになられていたってことは。

組踊が指定される前から使っているものですね。そういった、長く残る小道具自体も、ほんとに少ないんですよ。この講座の中で１回小道具のお話もあったんですけれども、やっぱり組踊の小道具っていうのは作るのが難しいと。全然物も残っていないというお話で。やっぱりこういったような先代からの道具っていうのは非常に重要なものです。

能　貴重ですよね。

鈴　はい。貴重なものなのでぜひ先生、これは要らなくなったら私にください。

（会場笑）

鈴　（笑）絶対ないと思いますけど。はい。公式に予約ということで、よろしくお願いします（笑）

（会場笑）

鈴　冗談です。

（写真３）

鈴　先生、この舞台は？光晴先生がいらっしゃって。

能　先ほどからお話申し上げてる、一番長編のものの、大川敵討のものですね。

鈴　（写真をポイントしながら）これが乙樽の役ですね。

能　そうです。糺の場っていう山場ですね。

鈴　糺の場。で、これが満納の子といって、乙樽に対してずっと詰問を責めてくる。

能　そうなんですよ。もうそれをかわすのにたいへんでしたね。

鈴　（笑）

能　無心の演技で、光晴先生も。あるいは眞境名先生も谷茶の按司で出ていらっしゃった。

鈴　ああ、こちら（写真をポイントしながら）に、

能　こっちがわに座ってらした。

鈴　眞境名先生がいらっしゃるわけですね、谷茶の按司。

能　はい。

鈴　ああ。すごいですね。

能　体がもういろいろと、受け答えしないといけんもんですからね、40分もそこで座ったままでやるもんですから、そこがちょっときついなあという印象が残ってますね。

鈴　さらっと言いますね、先生やっぱりすごいですね。またこの満納の子のはまり役というのが、また光晴先生がお上手で。

能　そうですね。

鈴　もうほんとに厳しいこと言うんですよね。

能　そうですね。

鈴　普段はそういうこと一切おっしゃらないのに（笑）

能　（笑）

鈴　まあまあ、演劇なので。先ほどお話のあった糺の場です。

（写真４）

鈴　これはちょっと形がちがう舞台ですが。これはどちらでやった舞台ですか？
能　これは能楽堂ですよね。横浜能楽堂でしたかね。
鈴　鏡板の老松が。
能　花売の縁の猿引の場面ですけども。
鈴　先生こちらですか？（写真で猿をポイントしながら）
（会場笑）
鈴　こちらでしたね。
能　（笑）そうです。
鈴　こちら名前、乙樽でしたっけ？
能　そうです。
鈴　乙樽と子ども。森川の子の奥さん役ですね。
能　鶴松ですね。
鈴　子役は鶴松で、お猿さんが出てきます。
能　そうです。
鈴　猿引の役ですね。
能　先生ね、これ、鶴松の役が今ちょうど国立劇場の組踊研修生って頑張ってますよね。
鈴　５期生の。
能　はい。比嘉……
鈴　ああ、比嘉くん。読谷の子。
能　そうですそうです。
鈴　ちっちゃいときに。
能　比嘉克之くんですね。
鈴　克之くん。不思議な子ですよね。
能　そうですねえ（笑）
鈴　不思議な子、なんか、分かってるからこういう話するんですよ。ちっちゃいときから組踊出てるんですよ、この子。だから、「組踊好きー」って言って。
能　そうですね。
鈴　だから、新聞紙上でなんか一緒に僕と載っちゃったときもあるんですけど。
能　ああ、そうでしたか。
鈴　この方の夢は……？
能　あのー……（笑）
鈴　先生の口からはなかなか言いづらいと思いますが。小学生くらいのときに「人間国宝になる」って。
（会場笑）
鈴　なれると思いますよ、多分ね。あと 60 年くらいしたら。
（会場笑）

鈴　頑張ってもらいたい。
能　熱心ですよ。
鈴　ほんとに熱心で。もう世捨て人じゃないかなっていうくらい、組踊のことを。台本読んだり、とても熱心な子ですね。
能　はい。
鈴　この時は初めての共演ですか？先生。
能　そうです。
鈴　比嘉くんの印象はどうでしたか？
能　もう、ほんとに熱心でね。素直で。で、覚えが早いんですね。ええ。もうほんとに。やっぱり将来が楽しみだなあという。
鈴　やっぱりこういうのを見ると、やっぱり時代がすごく変わったなと思うんです。先生のお話を始めからこうお伺いしてると、先生がお生まれになった時代っていうのはこんな（写真をポイントしながら）時代じゃなかったんですよね。ほんとに好きでも、組踊がそんなに上演されていない。まあ、村踊りでやるくらいで。
能　そうですね。はい。
鈴　というような時代で。今はもう、常設の劇場があるからこそ、という時代になったということですね。じゃあ、続いてはこれですね。
（写真５）
鈴　これは（写真をポイントしながら）阿嘉修さんです。
能　そうですね。
鈴　弟役。お姉さん役、悟さんですね。そして、これ先生ですね。組踊、じゃあ、えーっと……
能　女物狂。
鈴　先生答え言っちゃった。
（会場笑）
鈴　（学生を指さして）あっちに聞こうかなと。
能　ああそうでしたか（笑）
（会場笑）
鈴　たまにはこういう意地悪もしてあげないと（笑）冗談ですけども。えー、母の役ですね。物狂い、物狂い……あれ、先生これ孝行の巻じゃない？
能　これは……
鈴　物狂じゃくて、孝行の巻ですね。
能　孝行の巻ですね。
鈴　お姉さん、弟と。
能　失礼しました。
鈴　孝行の巻で、最後のシーンでお母さんが、生贄になると言って出て行った娘がいなく

なったので、物狂いになって。まあ、狂ったかたちになって出てくる、というところですね。いいですね、この。これは実際先生が全体をご指導なされて。

能　そうです。

鈴　はい。こういったような感動を呼ぶ場面も、先生がやられるときにはとてもなんか、淡々とされるような印象があるんですけど。

能　ああ、どうもありがとうございます。

鈴　なんか、芝居っぽくなくて。

能　それはね、やっぱり組踊の本質と言いますか、組踊とはこういうもんだっていう、これ、今でも劇場の研修生にいつも言いますがね、お芝居のようにリアルに演技したらオーバーアクションになってもう組踊じゃないぞと。組踊の演技っていうのはこうこういうようにやるんだと。だから、その目使い一つにしてもおろそかにしちゃいかんと。意味があるんだよと。

鈴　ただ座ってる、これにも意味がある。

能　そうです。こう首を垂れてるだけでも、これは悲嘆にくれている場合でも大事なことだと。まばたきしたり、目をきょろきょろしたりしちゃいかんぞと、そう言うんですね。お芝居だったら悲しい顔して、あるいは涙を流して、演ずればいいんだけれども、組踊はそうはいかんと。お客さんを泣かすんだよ、ということを言うんですよ。

鈴　自分が泣きたい、泣いてる場面は、逆にお客さんを泣かしなさいと。

能　そうです。

鈴　はい。深いですねえ。前回の嘉数道彦さんも同じようなこと言ってました。引き算が大事ということをおっしゃってて。それも先生方の指導の賜物ということをおっしゃってました。次の写真はなかなか珍しい写真で。

（写真６）

鈴　どこに先生がいらっしゃるのかご存じですか。まあ、これ（写真をポイントしながら）じゃないことは確かですね。

（会場笑）

鈴　もう一枚あります。

（写真７）

鈴　これ（写真をポイントしながら）先生ですよね。この役は、花売の縁の薪取、マルムンの中の一つのかたちでありますけども。これは先生、いつ頃のお写真ですか？

能　これはね……

鈴　ざっくりでいいです。

能　これは、多分、舞台が県立郷土劇場だったと思いますので。

鈴　ああ、こんな感じ、こんな感じ。

能　だいぶ前の方ですね。

鈴　だいぶ前。

能　何度か県立芸大でも、この、森川の子と薪取、２役をやったこともあります。
鈴　ええー！
能　はい。
鈴　私でも見たことがないですよ。先生が薪取やってるの。
能　（笑）
鈴　記憶にないというか。
能　薪取はもう、２、３、何回かやってます。
鈴　あ、じゃあ保存会のビデオを一からちょっと漁って見てみます。
能　好きなんですよ、この役も。
鈴　そうなんですねえ。ぜひまた保持者公演で、花売の縁、薪取で（笑）こうなると絶対先生こっち（写真の女性役をポイントしながら）をやるんですね。こっちに当たってしまうんですよ。
能　そうですねえ。
鈴　だからここなんですよ。で、そういう時の乙樽に当たる人がすごく緊張されると思うんですよね。
（会場笑）
鈴　この、先生の薪取の目の前で乙樽をやるっていう。もうなんか可哀想な、乙樽が可哀想にも見えるんですけども。やっぱり組踊ファンとしては、先生の薪取役をまた見る機会があればいいなあと、思っております。
能　勉強して、ぜひまた。
鈴　いえいえ先生、勉強するのは我々の方でございます。えー、ということで、貴重なお写真ありがとうございました。それではちょうどお時間でございますので、今一度、能鳳先生に拍手を。
（会場拍手）
鈴　長い間お話いただいてほんとにありがとうございました。

第 12 回「私と組踊」西江喜春先生

話し手：西江喜春
聞き手：鈴木耕太

西：西江喜春
鈴：鈴木耕太

鈴　皆さんこんばんは。時間となりました。座って失礼いたします。『組踊を多角的に考える―初演から 300 年―』、県立芸術大学附属研究所文化講座、第 12 回でございます。今

回は前回に引き続き、先生をお招きして対談形式で芸能・組踊についてご自身の経験を語っていただくというようなスタイルでさせていただいております。今日の講師は、組踊音楽・歌三線の人間国宝、そして本学の名誉教授でいらっしゃいます西江喜春先生をお招きしました。

（会場拍手）

鈴　皆さんにはレジュメというようなかたちで前回同様、メモと先生の経歴を軽くまとめたものを作っておりますので、それを読み上げるかたちで先生をご紹介したいと思います。

西江喜春先生は1940年、伊平屋村の前泊のお生まれでございます。1963年に正式に安冨祖流絃聲会の方に入門いたしまして、そこで宮里春行先生から師事を受けております。1996年から県立芸大で教鞭をとるかたわら、同年県指定の無形文化財・沖縄伝統舞踊の保持者として認定されます。99年には、沖縄県指定無形文化財・沖縄伝統音楽安冨祖流の保持者に認定されて、2001年には国指定重要無形文化財・組踊の保持者になります。2005年に県立芸大を退官されたあと、名誉教授になられております。また、2004年に開場した国立劇場おきなわの研修制度が始まって、2005年からは国立劇場おきなわ組踊研修の地謡ですね、組踊地謡の講師を現在も続けてお務めになられております。2009年には国指定の重要無形文化財の琉球舞踊の保持者、これは総合認定ですね。前回もお話しましたが、団体に対して人間国宝と同じような称号を与えるということです。それから、2011年に国指定重要無形文化財・組踊音楽歌三線ということで、各個認定、お一人にその無形文化財の保持者を認めるということで、通称「人間国宝」として認定されております。2013年には旭日小綬章を受賞されております。ということで、受賞経歴やら文化財やらもう肩にいっぱいいろんなものが乗っかっている大きな先生でございますけれども。今日は先生らしく、砕けたトークと言っていいのかあれですけど、先生の持ち味の西江節を聞かせてもらいながらお話をうかがっていきたいと思います。先生、ぜひ一つよろしくお願いいたします。

西　こんばんは。今の紹介ではたいへんな人間みたいですけど、酒好きの後期高齢者の西江です。こういう講座というよりは、飲み会の方がいい。

（会場笑）

西　楽しいんですけども。それも私は泡盛じゃなくて、冷酒なんです。冷酒のある店はよく行くんですよ。八海山がうまいですね。

（会場笑）

西　今日は、こういう偉い場所にちょっと、日頃話しないもんですから。笑いもしない話もしない、ちょっと研修生から、学校にいるときは学生から怖がられ、研修生からもちょっと「あの先生は……」というふうになってるんですけど。今日はまあ、一つよろしくお願いします。

（会場拍手）

鈴　ありがとうございます。先生のお人柄、ほんとに明るくてですね。ちょっと今、かなりご緊張されているんですよ（笑）さっきから。前回の能鳳先生もそうですけど、こういう先生方を見るとほんとに恐縮しきりでございますけど。先生、あんまり客席見ないで、ちょっと斜めに、はす向かいにしてもらえれば、ちょっとあれじゃないですか？

西　ああ、そうですか。いやちょっと僕、非常に、皆さん、私と同じ年頃の人が来てるもんだから、ちょっと嬉しいんですよ。

鈴　あー、良かった良かった。そういう話も。なので、人間国宝の先生方ね、というか、琉球芸能のプロですね、ほんとに極めてる方々が、どういうような生い立ちから琉球芸能を学ぶに至って、今のポジションになったのか、とか、その間の話を分かりやすく聞いていただくというような内容です。なので、まずは必ず生い立ちの話をお伺いしているんですね。先生の伊平屋島での幼少期の思い出などからスタートしていきたいと思うんですけど。

西　まずは三味線というよりは、まあ、各市町村どこにもあれなんですけども、旧暦の８月 15 日は八月十五夜といって、どこでも、各字・村ごとに豊年祭があるんですよね。で、うちの方は前泊っていうところは新しい、明治何年かに作られた部落で、田名部落っていうものの分かれなんですけども、いろんな、いわゆる、本島とか、伊是名村からの分かれが主ですけど、その中で豊年祭というのがあるんですよ。その豊年祭っていうのが、割と、組踊っていうのは１つだけしかありません。花売の縁、これ一つだけ。あとは舞踊とか。舞踊が主で、現代音楽をまねてみたり、そういう新しいのの方が多いんですよね。その時は、組踊やると眠ってるし。

鈴　（笑）

西　青年は豊年祭の一ヵ月前からは、朝から練習なんですね。朝から練習するもんですから、夕方は必ずヤギや豚が出る。

（会場笑）

西　で、練習の時は三味線の人の前にはちゃんとご馳走がある。で、三味線に合わない踊りが来たら、お前はもう一回先輩から習って三味線弾きなさい、という、これくらい三味線の人たちは、何て言うか、権威があるんです。今でも私は田舎辺りはものすごく強いと思いますけどね、うちのところでもそういう。ほんとに、三味線始めたのは、NTT に私はいたんですけども、NTT の表彰のときに「音楽を始めたのはどういうきっかけですか？」と聞かれて、「地謡の前にあるご馳走を食べるために」というと、それが元で今はこんなして（おなかを触りながら）やりきれない。

（会場笑）

西　言ってるんですけど。発想がね、本当に単純なんです。もう、それからは、高校が農業校でしたんで、名護の寮に入って。名護の寮に入ってからは、民謡っていうのがとても好きで。これは何かを歌わなきゃいけないなと。で、伊平屋の方では、前泊の方では伊江島ハンドー小がもう一番得意だったんです。もう亡くなりましたが、私のいとこくらいに

なるかな。その方が船頭主やって。で、田舎では役名で、役の名前で人を呼ぶんですよね。名は松吉さんだけど、松吉兄さんとは言わない。船頭主という。このくらい浸透して、この人の役名なにして。で、ハンドー小がうまい人は、もう生涯ハンドー小と呼ばれる。

（会場笑）

西　マチー小はマチー小で、というように。そのくらい劇に関しては盛んでしたね。

鈴　先生が高校生の頃っていうのは、僕ちょっと前におうかがいしたんですけど、伊平屋の方に分校があったんですよね。高校の。

西　高校の本校は、今では考えれないんですけど、あの当時までは１年生から本島に行かすっていうことが経済的にとっても無理な話。で、伊江島、伊是名、伊平屋は、１年間は20名くらいの分校を作ってるんです。で、そのために１年間は経済的にこういう、父兄に負担を与えないように。これのために、私より３期までで終ってしまったんです。

鈴　ああ、そのあとは全部１年からみんな名護の高校に。

西　１年からもう。で、今でも、離島の高校の問題は。

鈴　ありますね。

西　今日も私の方に１人来ていたんですけど。今でもまだそういう問題があるんですから。いろいろ大変ですね。確かに田舎の高校に行かすっていうのは。今の人はお金がたくさんあるからいいんですけど。

鈴　（笑）

西　伊平屋・伊是名あたりは、ちょっと大変なんですよ。そういう意味では、分校をそのまま続けてもいいんじゃないかなと、言った覚えがあるんですけど。

鈴　その分校から、２年生になって、旧制三中の女子寮。

西　そうなんです。寮生が200名いますからね。

鈴　多いですねえ。高校の人が……

西　旧制三中の校舎を利用して使っていたんです。その時に、１部屋に８名くらい。

鈴　寮生が？

西　寮生が。

鈴　どれくらい、１部屋何畳くらいなんですか？

西　いや、結構……椅子の向こう側くらい。

鈴　へえ！あの椅子の後ろ側くらい。

西　そうそう。

鈴　皆さんの固定されてる椅子の広さ。

西　その中に二段ベッドで、１年生は下、３年生が上。

鈴　ああ、年功序列で（笑）

西　で、自分のちゃんと勉強机も置けるようになってる。

鈴　あ、そこで、寮は寝泊まりだけじゃなくて、自主学習もできるようになってたわけですね。で、そこで夜な夜な、さっき言ってた民謡大会を。

西　ええ、もう。民謡を覚えてたいへんこう。３年なってからは３名か４名くらいの部屋に行って、それからはやっぱり自分の民謡というか。三味線は弾けないんですけど。

鈴　え、三線弾かずに歌だけをされてたんですか？

西　歌だけを覚えるように。ラジオからの音だけを、やってました。

鈴　世が世なら、三線持たなかったら、もしかしたら歌謡曲の方で（笑）

西　いやいや、歌謡曲はもう、「お富さん」しか知らない。

（会場笑）

鈴　（笑）でも先生、その時は、今おっしゃられた、亡くなられた方っていう方が三線はお弾きになられてたんですか？

西　いや、同級生なんですけど、彼は伊平屋島の人ではない。三味線は弾けるけども、彼はまた歌が歌えない。

（会場笑）

西　で、僕は歌が歌える。で、寮の中で三味線弾いてると、「ああ、鳩間節弾いてごらん」って言ったら僕が歌って。その時からもう、浜千鳥とか鳩間節とか、そういうのは歌われてるわけです。

鈴　あれですよね、今の高校生が聞くと、ドゥマンギル話ですよね。もうすぐ鳩間節、それから浜千鳥とかそういったので。で先生、三線はその方が家から持ってこられたんですか？

西　そうそうそう。

鈴　ああ、持参して。

西　持参して。

鈴　寮内に楽器持ち込むのは別に？

西　別に、あの時は、はい。ギター持ってる人もわりといましたよ。

鈴　へえー。なんかいいですね。

西　そういう意味では、あの当時は、何も厳しいことはなかった。

鈴　寮長がとっても良かったという時代ですね。先生その名護の高校で歌を歌われて、そのあとご進学されますよね。東京の方に先生行かれて。

西　はい。中野無線っていう、トンツーの、中野無線っていえば、今の先輩方はスパイ学校っていう……

（会場笑）

鈴　（学生に向かって）分かる？トンツーって。

西　トンツーって分らんね。

鈴　この子 18 歳。

西　モールス信号。

鈴　モールス信号って分かる？分からないのは分からないって言った方がいいよ。

（会場笑）

西　ツートツートンっていうのは２っていう。Ｃはツーツートツーツー。
（会場笑）
鈴　現役です。
西　これだけは覚えてる（笑）SOSは、トトトツーツーツートトト。これは世界中一緒。だから、SOSが来たら、優先的にこのSOSを聞かないといけない、国際条約がある。トトトツーツーツートトト、トトトツーツーツートトトというのはSOS。こちらはなになになになに。
鈴　言葉を全部、ツツツとトーだけで、やるわけです。それが無線通信。はい。
西　で、中野無線のときも、またその中に中部の栄野川さんって言う人が、私50年ぶりにこないだ会って感激したんですけど、この方がまた歌は歌えないで三味線を。
（会場笑）
鈴　西江喜春が行くところ、行く先々には、歌は歌えないけど三線弾けるって人が（笑）
西　三線弾ける人はちゃんと。
鈴　いたと（笑）
西　で、夏休みや春休み、寮の人は各県から来てる人は帰りますが、寮に、こっちにも300名くらいの寮人が。寮の中に５、６名しか沖縄の人いない。
鈴　案外少ないですね、沖縄の人。
西　少ない。仕事は僕は夜間である。昼はアルバイトしてやってたもんで、夏休みも帰れなく、仕事やってたんですけど。で、夏休みに帰ってくるときは、やっぱり三味線の弦を持ってきたり。
鈴　ああ、沖縄から。
西　そうそうそう。栄野川くんも三味線弾いて。こないだ50年ぶりに会って、「あんた、三味線はどうした、弾いてるの？」「いや、とてもじゃないけど、弾いていない。あんたが三味線弾いてるでしょう」という話して。
鈴　50年ぶりですね。ということは、ほんとに学校卒業して以来ってことですよね。
西　訪ねよう訪ねよう思うけど、訪ねようってやりながら、変なところで、歯医者さんで会って。
鈴　あはは！（笑）
西　僕はもう、（歯の治療を）やるっていって来たら、「もしかしたら西江違う？」と。「はい、西江です。あ、栄野川さんね？」「そうです」て。
鈴　へえー。
西　ということです。
鈴　すごいですね。沖縄狭いというか。
西　狭いです。
（会場笑）
鈴　先生それで、中野でも民謡を歌って、喉を鳴らして、で沖縄に帰ってきて。

西　沖縄に帰ってくるときに、鹿児島から船で帰ってきたんですよ。移動室で、寝ていたら、ある方が本を読んでる。「マイクロ回線の設備」っていう本を読んでる。「すみません、何か通信関係ですか？」って言ったら、「うん、ちょうどマイクロ線を本土から」と、マイクロ線の施設のために本土で研修受けたという方がいて、たまたまその方の傍にいて、「じゃあ、あのー、すみません、私三級無線の通信士の免許持ってるんですけど」琉球電電の時代です。今の首里高の向こう側に。ああ、首里高じゃない、那覇商業の。今問題になってるあの公園です。向こうにあったんですけど。琉球電電に行って、うまい具合に、履歴書を出したら、「試験があるから、じゃあ何日に来い」と。３名くらい受けましたかな。で、割と、今言ったようにこのツツートツートンっていうのが、私わりと、自分で言うのもなんですけど、符号が綺麗かったんですよね。これは手首が柔らかい人はわりとうまい具合にできるんですけど、手首が硬い人は、トトトっていうこれがうまい具合にできないんです。ツーツートツーツーというふうに。で、こないだ映画見ると、アメリカは、うちはこうなんです、日本はこうなんですけど、向こうはこうなんですね。これでやってるんですよね。

鈴　叩く感じで。

西　叩く。

鈴　日本はこう柔らかく。

西　柔らかくこうやるけど。あれ、国が違えば叩き方も違うんだなあと。

（会場笑）

鈴　映画見ながら？（笑）

西　映画見ながら。ああ、こういう動きが、叩き方があるんだなあと。あれには、昔の西部劇によく出たじゃないですか、あのー、カチャカチャってやる。

鈴　はいはい。交換電話。電話交換……

西　電話じゃなくして、有線で。あのー、何て言ったかな。あれはテクス線っていうんだけど。こっちはティーティーティートツーツー、ピーピーピーの音なんですけど、あっちはカチャカチャカチャカチャって音なんです。これも僕らやりました。そこまで。でも、沖縄の郵便局と那覇の中央のこの電電とはこの回線で。で、八重山、宮古、大東、北大東、各離島は無線で。

鈴　電報という感じですね。これで。

西　電報です。

鈴　はいはい。

西　その時に、うまい具合にそばの人に採用されて、で、通信社というところの、通信課というところに入ったんですけど。そこはまた人間多くて、100 名いるんですよね。

鈴　通信をする人が。

西　はい。ですから、24 時間順番でやる。

鈴　ああ、電報は。

西　電報。

鈴　今はもう勝手に機械が受信してくれる。

西　これでやりますから、「ハハキトク」というのも夜打って、朝にはとくに、すみません、宮古の人は急用があると夕方に「ハハキトク」と言って電報打つんですよ。そうすると朝着くように。で、これを航空会社に持って行って「ハハキトクですから」というと、優先してくれる。

鈴　あ、優先搭乗ができる。

西　できる。

鈴　ほおおー。

（会場笑）

鈴　すごい時代ですね。「ハハキトク」のカタカナ５文字で優先搭乗。すごいいい時代ですね。

西　もう、もう。ですから、「ああ、またハハキトクか」と。

（会場笑）

鈴　ああ、そっか、打ち込む人はいろんな人の「ハハキトク」を見るわけですね（笑）

西　ああ、また危篤かあというような。

鈴　じゃあ、盆正月のシーズンになると。

西　一番忙しいのは、母の日です。

（会場笑）

西　「ハハオメデトウ」で、どんなに上手い人でも、１時間に30通電報を打てれば、これはもう物凄い上手い人です。

鈴　早くて正確。

西　早くて正確。で、その時は、打つ人は打つだけ、聞く人は聞くだけで、２人座って１人はタイプ打って聞きながら。で、字が何か分からなくて止めてもう１回やってって。お互いに２人ずついてもどう伝えても100通を１時間にはちょっと無理ですね。で、イヤホンを付けてやるんですけど、これも、１時間やればもう頭がパニック状態になります。

鈴　耳からはツーツーツーとトトトしか流れてないわけですよね。

西　あの当時、色の白くて痩せてる人は、あ、通信士だなと。

（会場笑）

西　で、「仕事何してるか？」と言ったら「通信士」と言えば、100人いますから、交代制ですから、お互いの、僕は２か年くらいやってようやく人の名前覚えるようになったんです。

鈴　ああ、人が多すぎる。

西　多すぎて。日勤日勤夜勤後番とやれば、休み休みなんですよ。看護婦さんと同じで。ほとんど家にいるんですよね。

鈴　（笑）

西　だから、この子今仕事何してるんだろうと、隣近所で。そして、朝から三味線テンテンしてるから、

（会場笑）

西　仕事何してるんだろうなあっていうのが、隣近所で。

鈴　そうか、日勤の時は２日しかないわけですね、１週間で。

西　そうそうそう。１週間で２日しか朝の８時半から５時までない。あとは、昼の１時から行って。で、次の日は５時から行って朝の８時半。で、５時から行っても、忙しいのは９時までです。

鈴　ああ、そうなんですね、当時は。

西　夜はもう、９時からは、例の「ハハキトク」か、

鈴　はい（笑）

西　何かの電報くらいですから。

鈴　緊急な電報。

西　緊急な電報しかないですから。普通の電報はもうやらないですから。だから、通信士が４名泊まる。そんなに忙しくないんですけど、福岡との通信と東京との通信、これはもう自動的に入るようになってる。そういう時代ですから、休みが多いし暇だから、この無線通信課って、電報課って言ったんですけど、電報課に音楽やってる人いますかっていったら、もういっぱいいるんです。

鈴　今の琉球古典音楽とか、古典音楽の世界ですよね、の重鎮たちは、ほぼ電電公社出身なんですよね。

（会場笑）

鈴　これがすごいんですよ。なんか、生み出してるような感じで。

西　こないだ、今のNTTの人に、NTTから人間国宝が出てるから、ぜひ一曲歌ってくれって。「あんた分かるねえ、一企業から人間国宝出てるっていうことは、この会社は仕事がないんだなあって意味になるよ」って。（会場笑）「それでもあんた方それでいいの？」って。

鈴　そうですよね（笑）

西　これがうちの宣伝になるって。NTT出身で人間国宝っていうのをやりたいと。いや、これはやめた方がいいやーって。もうどうしてもって言うから、じゃあ、１周年記念ということで。前の支店長のうち。今度もまた、卒業した社員たちが集まってるところに、どういう歌を歌うか聞かしてくれ、というような。同じNTTに居ながら、どういう歌か、組踊歌三線て書いてるのに、どういう歌かって。普段ほんとに、全部見てないんだなと、ほんとに思いました。当時の同じ同僚でも、「ああ、あれは、西江は前から歌うたってるから同じ歌だよ」って、社員はね。だから古典っていうのに、先輩方はわりと理解があるんですけども、今の若い人たちは、組踊っていっても、「何ね？」っていうのが多いですね。まあNTTはそういうところが、私たちの時代まではこういう風な余裕が充分あった

んです。
鈴　すごいですねえ。
西　今はちょっともう難しいです。
鈴　当時のNTTから先生も出られて、笛の大湾清之先生とか、我が校の学長とかですね。
西　そうそう（笑）比嘉さんもそう。
鈴　比嘉先生なんかも電電公社という話で、まあほんとに、たくさん輩出している企業、優良企業ということで。で、先生そういう、電電公社に勤められてから、安冨祖流の方に？
西　そうですそうです。先輩に……。私は家では、かぎやで風と浜千鳥と加那よー、３つできれば地方と認められるんです。
鈴　おお、３曲が大事。
西　で、この３曲を習うために行ったんです。
鈴　あ、そうだったんですね。
西　はい。３曲習いに行ったんですけど、「えっ？」って言って、「三味線は、初めから簡単にこんなに教えるもんじゃないよ」と言って、安波節からやりました。
鈴　へえ～。
西　安波節、秋の踊り、とだんだん行って、で３年くらい経ったら、「そろそろ西江、お前コンクール受けないか」って言われて、コンクールって……それまでコンクール知らなかった。
鈴　え、でも先生が習いに行かれた頃にはすでにコンクール始まってますよね。
西　始まってる。タイムスでは。
鈴　はいはい。
西　タイムスでは始まってるんですけど、私が受験しようとしたら、
鈴　あ、発展的解消ってやつですね。はい。
西　タイムスがおじゃんになっちゃった。
鈴　はい、有名な。
西　有名な。
鈴　（会場に向かって）発展的解消です（笑）
西　発展的（笑）で、いろいろ先生から聞かされたんですけど、話をするような内容じゃないんで、ちょっと。
鈴　これはほんとに冷酒を持ちながらじゃないと話せない？
西　できないです。
鈴　（笑）
（会場笑）
鈴　はい。それで新報で受けられたんですね。
西　そう。新報で、第１回目ということで。第１回の伊野波節。で、安冨祖流からは２人しか受験やってないんですよ。このぐらいあの当時は安冨祖流っていうのが少なくて大変

でした。もう、習いに行っても、先輩たちはもう岸本先生、照喜名先生、大城助吉先生と、先輩方はもう活躍されているんですけど、これの下の人たちはあまり人材がいないわけです。それでもって、もう私も、新人賞取って、優秀賞取らないうちから、お前はどこかの研究所の、

鈴　舞踊道場の専属地方。

西　舞踊道場の地方に行きなさい、という風に。あの当時は踊りは生演奏なんですよね。

鈴　カセットテープがなかった時代と……

西　いや……

鈴　あの、オープンリールの時代という？

西　そうそうそう。だから、生っていえば、１週間、新報の10時から７時までずっと家にいなきゃいけない。１週間。

鈴　１週間。舞踊道場にいて。

西　私もちょっとおじさんおばさんたくさんいるんですけど、皆さん亡くしてます。休むたんびに……

鈴　そっか、会社を休むために親戚どんどん殺していかないといけないわけですね。

（会場笑）

西　おばさんを亡くして……

（会場笑）

鈴　（学生に向かって）分かる？

西　有給で。その時は、組合が強いですから。年休が20日あるわけです。で、病休が10日間あるんです。病休をやらなくても10日間は休んでいいよっていう。こんないい会社はない。

（会場笑）

鈴　すごいですね。

西　考えられない。今、あの当時、全電通って組合ですから。これが沖縄では強かったんです。自治労、全電通。かな。

鈴　あー、すごいですね。

西　うん。強かった。郵政と電電と、２つで。

鈴　ああ、もう、国の会社。

西　もう。

鈴　春闘が怖い。

西　春闘はもう大変。

鈴　すごいですね。

西　国じゃなくて、一つの会社ですから、交渉もやりやすいんですよ。これだけ儲けてるじゃないか。儲けてる分、従業員に返すのがあんた方も上げる、っていうようなかたちです。

鈴　そういう休みをフル活用して、コンクール稽古というか、舞踊の、

西　地方をやり続けたという。

鈴　これは毎日行かないといけないってわけですよね。

西　いや、そうそうそう。

鈴　決められたグループで。安冨祖の、野村も一時期あったと思うんですけど、安冨祖流は特にこのグループ制というか。

西　はい。玉城流が多いですから、安冨祖流は玉城流がわりと、地方多いもんで、自然にそのコンクール受ける踊りの人たちも多いですから。で、一番苦労したのが、私はもう新人受ける頃、あの頃あんまり声出なくて、とても苦労したんですけど、このコンクールのお陰で、声がどうしたら出るようになるんだろうと。で、その当時は照喜名先生と一緒だったもんですから、照喜名先生は１人で伊野波節歌っても平気なんですよね。大体伊野波節と柳、３名ずつくらい歌うと、あと何やってるか分からないですよ。

鈴　酸素が足りなくなる。

西　空気がなくなっちゃって、酸素不足みたいになって。僕はある先生に「すみません、ちょっと休ましてくれませんか。あの、僕らカセットテープじゃないから。人間だから……」って。

（会場笑）

西　そのくらいまで言ったことがある。

鈴　そのくらいもう、舞踊は１人に対して、だから歌うわけですよね。

西　そうそうそう。

鈴　受験する人。

西　受験時には１人ですから。

鈴　女の子１人に。で、それを延々とやるんですよね、夜の間。

西　そう。かせかけからはじまって、優秀賞になると伊野波節になるんですよ。

鈴　長くなる、また（笑）

西　もう伊野波節やかせかけは、「オッケー、一揚は僕が歌うから、次の歌は二揚は西江歌え」で交代でやって。伊野波節も今の歌い方のように一人ずつ歌って、中からは二人で斉唱というかたちにしました。でも、コンクールの本番になるとそうはいかないもんですから。どうしても２曲続けてやるっていう。

鈴　じゃあもうほぼ実践形式で、お稽古ももちろんやるんですけど、夜はコンクールの時期は実践形式で舞踊道場どさ回りというか。

西　そうですね。

鈴　もう一晩中歌い続けて。で次の日も、また次の日もっていうような。夏が来ると。

西　土曜日曜なると、照喜名先生は休みなんですよ。

鈴　（笑）

（会場笑）

西　あのー、アメリカの飛行機会社。

鈴　ああそうですね。

西　何だったかな。

鈴　ユナイテッド航空かアメリカン航空かどちらか。

西　アメリカン航空か。

鈴　はい、ですよね。

西　アメリカン航空の、アメリカさんがこっちいますから、アメリカから直接こっちに来るわけです。この整備士として照喜名先生は勤めていたんで。照喜名先生は土日は完全に休み。

鈴　（笑）

西　で、私はそうはいかない。土曜日にあうか日曜日にあうか分からないから。

鈴　休みの日がですか？

西　そのたんびになにですから。おばさんを亡くして。

鈴　ああ、そうか。毎週、何週間に１回かはおばさんを亡くさないといけない。

（会場笑）

西　もう。いや、おばさん７名くらいいますよ。

鈴　（笑）

（会場笑）

西　いるんですけど……

鈴　いるんですけど、当時はそういうような状況だったと。だからそういう実践向けの稽古って、今は多分、若い子たちというか僕ら世代の地謡なんかに聞いても、ほぼやらないんですよねえ。で、しかもその頃のコンクール自体も、ご自身が受けられたコンクール自体もすごい感じですよね、くじ引き引いてその場ですぐ歌うっていう。

西　優秀賞あたりは４曲あるんですけど、ああ、５曲、昔節と二揚げ。で、歌う前に行ってくじを引いて、「ああ、作田です」で歌って。で二揚げのを引いて「ああ、散山です」って、２つを歌うんです。

鈴　すごいでしょ。今は決まってるので、それを稽古して、２曲とか３曲決まってるので、それを稽古して臨むというスタイルなんですけど、当時は抽選なんですよ。その場に行ってぱっと引いて。まあほんとに実践力が問われるような感じのコンクールをずっとされていた。あとは、今は何年おきに受けなさいっていう規定がありますけど、それもなくて、連続で取る方もいらっしゃったり。

西　僕までは毎年受けられたんですよ。だから僕は新人優秀続けて受けて、１年休んで最高賞とった。このぐらい、何というかな、先生のところに通わなけりゃできない話なんですよね。

鈴　先生が電電公社に勤めてて、昼は週２回、それ以外の夜出勤の時のお昼は先生の稽古場に通って。

西　そうですね。台風の時も行ったら、「は、ああお前か、今日は台風だよ」って。

（会場笑）

西　台風の時はやっぱり休みだなと。

（会場笑）

鈴　ほんとに稽古、稽古。先生のお話聞くとずーっと稽古されていて、それで実践をされるというようなかたちの三線人生というか。もうほんとに古典漬けの生活をされている、というお話で。今の若い人たちが聞くとちょっとびっくりするような感じの稽古です。で、続いてはちょっとお伺いしたんですけど、組踊の地謡を本格的にやり始めたころのお話をちょっとお伺いしたいんです。

西　これはですねえ、復帰時点で国の指定になってるんですよ。でその指定の時から、伝承者っていうのがあって伝承事業っていうのがあったかどうかはちょっと分からないんですけど、伝承者の時には一緒になってるんですけど、今のようにちゃんと毎週、毎月でもいいんですけど、今は毎月ですね、毎週、ちゃんと保持者が来て、これはどういう歌だからこういうふうに歌う。一応研究所で先生から習って初めて本番はやるんですけど、当時としては、私などはもう先生に「西江、三味線持たなくていいから見るだけでいいから見なさい」ということで。

鈴　これ非常に分かりにくいですね。

西　これが二童敵討だったんですけど、宮里先生と照喜名先生、大城先生、岸本先生、４名でやるということで。で、たまたま、大城先生か岸本先生どっちかが風邪ひいて、ちょっと伊野波節無理だから、西江お前歌えって歌詞持ってきて、「はい、二番目の歌詞はお前歌いなさい」って言って、三味線持たなくて歌わされて、初めてなのに。

（会場笑）

鈴　これすごいことなんですよ。これでできるっていうのが。人が三味線弾いて（笑）

西　これ、もう、発表会でも１回安冨祖流はそれやってはいるんですけど。うーん、伝承者の時にこれされて、もう声もこんなにはっきり出ないのにこういう歌を歌わされるという。これ組踊っていうのは私にはできないなあとほんとに思ったんですけどね。

鈴　それが復帰直後のこと。

西　はい。

鈴　これ、普通に聞いて、安冨祖流の人たちでもあり得ないと思う状況ですよね。歌詞だけ見て三線持たずに、「はい歌いなさい」ですよ。で、歌詞ももちろん普段歌ってる伊野波節じゃない……

西　じゃない。

鈴　わけで。組踊の工工四の歌詞で。しかも、前奏なし（笑）

西　そうなんです。

鈴　自分で弾かないのに前奏なしで歌うっていう。これかなりな高等技術ですよね。

西　これは、組踊好きになったのは、うやんまーという曲なんですけど。これは一番有名

なのが与那国しょんがねーと小浜節、これの掛け合いなんですよね。これを聞いて、あ、組踊やろう、というように思ったんですけど、二童敵討で出た時に伊野波節歌って歌えっていったらもうこれは僕ができる芸じゃないなって思ってしまうんです。歌習いに行って歌を楽しもうとしたらだんだん苦しくなってきたんですけど、組踊見ると。前奏なしで歌えっていうのはとても難しい話で。これはよほど音感がなければ。立方はどうしても遠くに聞かすために声をちょっと上げて唱える。特に男性の時は普通の高さでやるんですけど、女形になるとちょっと上がって出してるもんですから。この音高に三味線がついていけるかっていうのはとっても難しい話で。で二揚げは、干瀬節は何から出すとも教えてももらえてない。散山は何から出すというのは。で、こないだちょっと伝承者に聞いたら、散山は何から出すと思うね？って聞いたら、女弦聞いてますって。いや、女弦聞いたら高いよ、中弦聞いて、中弦から音を出すようなかたちにしなけりゃ音程が狂っていくよって。この立方と音楽の掛け合いなんですけど、この差っていうのがちょっと怖いですね。組踊。

鈴　うーん。かなり高等な話をしています。まあ弾ける人たちはよく分かると思うんですけど、だからセリフに引っ張られると、歌も上がってしまうので。でも三線は変えられないじゃないですか。だから三線の調弦に合わせてちゃんとこっちは歌わなきゃいけない。だけど、前奏がないから歌いづらいっていう。でそれのノウハウを今おっしゃってたんですけど。そういうふうな練習をされていて、実際には伝承者として組踊の保存会の伝承者でこう習っていた頃はいろんな先生の地謡のやり方というか、指導を受けたというかたちですか？

西　一緒についてきなさいということで、先生が。で、伝承授業で私ものすごいショック受けて、執心鐘入の散山歌いなさいということで。で、出だしから狂ってるんですよ。狂ってるのは分かるけど直しきれない。途中から直って、どうにか。で、うちのは、安冨祖流の場合は後ろの「死ぬが心気」というのはちょっと歌い方が違うんですよ。

鈴　「チイ」ってあげますよね。

西　上に、「チイ」って上に上げるようなかたちで。しんち～だけど、しん「チイ」というような歌い方するんですけど。その歌い方もちょっと難しいんです。何回歌っても先生がうんとは言わないんですよね。「いやいや、違う」と。で、ようやくテンポも合ってきますから、先生の教わって、「先生もおんなじように歌ってるんだけどなあ」

（会場笑）

西　と思ってるんですけど、やっぱり先生は「違う」ってしか言わない。そのぐらい、先生からするとやっぱり違うんですよね。

鈴　うーん、すごいですねえ。あとは、金武良章先生の、金武良章先生は立方でもあるんですけど、ご自身で三線も弾いて、組踊の有名のなんかは初めの頃はご自身で歌も録音して唱えをして、オープンリールで自分の歌を流してっていうような感じで上演されてたことがあって。

西　正月の３日かな？に、必ず金武先生は組踊ずっと続けてたんです。で、その時のうやんまーはあまり。ですから、このリールでやってますから、唱えと合わないわけです。唱えが終わってから歌が「よなーぐーにー」っていうように出てくるもんですから、合わないんでこれは批評家の中では一番、こういう組踊はないっていうよりは、こういう形式は、っていうように新聞に出て、ちょっと論争があったんですけど、それはもう金武先生は自分の歌にこだわって、歌い方も、特に安冨祖流にこないのは、安冨祖流は声が大きくて組踊には合わないって先生はおっしゃるんです。

鈴　（笑）

西　いやー、歌を歌うのは大きく歌えとしか言わないのに、小さく歌いなさいって言ったらちょっと戸惑って、で宮里春行先生も同じ、金武先生も安冨祖流ですから、歌は一緒ですから「金武先生、この若い子たちちょっとできるから使ってやってください」って。で、安冨祖流使い始めたのが、踊りの先生方が組踊の世界に入るようになったんですね。そしたら発表会の時には、「先生、地方入れなきゃこれ私たち合わしきれないですよ」っていうことで、ようやく、踊りの先生方が組踊やるようになって、生の地方が入るかたちになったんです。それからは毎晩に行ったんです。で、金武先生から、最初は岸本先生、大城先生などが中心で。その後はちょっと私が中心に、うちの弟子などが行ったんですけど。さすがに、小僧ですから、言いやすいんですよね。「西江、あんたの仲風は大きすぎるから、もっと落として入れなさい」で、干瀬節の３番目の歌詞、「振り捨てて行かば　一道でもの」というのはテンポは速く歌ってるんですけど、金武先生はそうじゃなくして、同じ前半の歌詞と、上句と下句はおんなじ歌い方。現代は下句はテンポが速いんですね。「ふりしてぃてぃ～」とものすごくテンポが速いんですけど、そういう歌い方じゃなくて、同じ歌い方で、強い意志で歌え、声で歌え、という指摘をしょっちゅうされて。で、先輩にはそれ何も言わないんですけど、やっぱり私は小僧ですから、言いやすいんですよね。そういう面では、アーキーなども自分が声のある限り歌ったら、「大きいからもう少し落としてやりなさい」て。これはありがたいことなんですけど。で、先生は自分ではそうおっしゃりながら、一度舞台に出ると、声ものすごく大きいんです。

（会場笑）

西　何で……。で、こないだも、お医者さんの人が組踊やってる人がいるんですけど、「金武先生はこういう教えだったんですよね」って言ったら「そうだよ」って。で、「私にも歌い方ちょっと大きいから抑えてやって」って。で、首里城のオープンのとき、花売りやったんです。その時に森川の子を先生がやって。もうものすごい力強い。あの当時、もう年齢も相当行ってますから、やって。それでも声も外に通る。なんで僕らには小さく歌えって言うのに一度舞台に立つと大きい出す。そこがだからどうも考えられないです。

（会場笑）

鈴　（笑）まあ、いま金武流、安冨祖流の音楽の中でも金武良仁先生からのこの歌い方ですけど、あまり人数が少ないところなので。やっぱりその名人同士で歌い方が少し違うと

か、心持ちが違うっていうのを表現するところも、組踊の地謡のいいところというか、面白いところかなと思うエピソードですね。先生がずっと、今、話の流れで、端々で出るのが、「私は声が出ない」と。嘘のような話ばかりされるんですよ。もう西江喜春と言えば、あのハイトーンボイスのあの美しい声という、絶唱をするっていうイメージがすごく僕らも強くて。で、先生はそうじゃないと。声が出る始めはどれくらいだよという話があったので、芸大に入ってからの話をちょっと。

西　芸大に入って、私は声が出るようになったんです。というのは、芸大に入ってからは学生に声作るような話やらなきゃいけないんですよ。で、声作るにはどうした方が、まあ、ほんとは毎日歌った方がいいんですよ。で、芸大で銘苅子やるっていうことで、銘苅子の大アーキーっていうのがあるんですけど、これちょっと難しい歌で、ほんとに難しいんです。で、これを徳太郎先生と一緒にいたんですけど、「西江、あんたがアーキーを歌ってね」と。今までは天下の照喜名朝一がいますから、アーキーといえば照喜名朝一と考えてる。皆さん考えて、また例の通り本人もそう思っていますから。

鈴　例の通り（笑）

西　そういうかたちになってるんですよ。僕などが出る幕がなかったわけです。で、芸大きて、大アーキー歌いなさいって言ったときに、ああこれはまた厄介なことだと。

（会場笑）

西　どうしたら、「アーキーうみきい」、うみき「い」って言葉で切れるんだったら素敵なんですよ。僕はもう、うみきいいって言葉が出なかったわけです。

鈴　流れてしまうわけですね。うみきーって。

西　そう。

鈴　うみき「い」ゆ、と言わないと。

西　き「い」ゆ、と言わなきゃいけないのに、「きー」ゆとなってしまう。その時から、どうしたことか、ほんとに悩みましたね。自分で歌いきれなきゃ学生には言い切れないし。で、もう、皆さんは初めから。C# で歌ってたんでしょうと言うけど、いやいや私は声が出るように、ほんとに自分が今声出てるなあと思うようになったのは芸大に入ってからしかやってない。ですから、55 過ぎなんです。本格的に声出たのは。

鈴　意外ですよねえ。

西　だから、組踊研修生が今の大学院にいますけど、ものすごく気にして、「先生、高い声出すにはどうした方がいいんですかね」と言うから、「いやもう、毎日歌う以外にないよ」ということで、高い時でも低い音でも、腹の底からやりなさいというけど、腹の底にやってると、声ってのは大きい声出して高い声でも低い声でも、胸に響かすような要領でやらなきゃいけない。

鈴　難しいですね。全部は頭に入ってこないですね。

西　うん。

鈴　お腹から出すんだけど……

西　出すんだけど、胸に響かすようなやり方しなきゃ、声がほんとの声にならないです。だからそこが難しい。ただ、先生方はもう最初っから声出てるから何ともないんですけど。で、いつも言われるのが、「いつ頃から声出たんですか」っていうような。声が今の声になったのはコンクールのせいなんですけど、

鈴　コンクールの「せい」ですよ（笑）

西　高い声出して、この大アーキーっていうのをほんとに歌えるようになったのはもう、芸大に来てからしか。だから、研修生にも言ってるんですけど、「いやいやいや、あんた方まだ20、30でしょ。あと10年20年も早いよ」って。

（会場笑）

鈴　すごいですよね、これ名言ですよ、名言。あんたたちまだ早い（笑）すごいですよね。でも芸大では結構、西江先生の武勇伝というか、会議で発言したら声楽の先生方が全員振り向いたっていう。声がね、声がすごく通っているので全員振り向いたっていう伝説があるくらい、やっぱり芯の通ったお声で。

西　いや、これはね、ハイルマンっていう方がいたんですよ。

鈴　声楽の先生ですね。

西　声楽の。彼がおうち作った時に私行って、かぎやで風歌って、二揚げ1曲弾いたんです。そしたら彼はいつもは家で一回も歌ったことない。彼は鐘のならない歌は歌わない主義。

（会場笑）

西　洋楽の世界の人ですから。全然歌わなかったんです。で、父兄がいたんです。あ、奈緒美さんの。

鈴　ああ、松田奈緒美先生。

西　松田先生。その時に、私はかぎやで風を歌って。沖縄には、あんた方今からヨーロッパに行ってこういう風にヨーロッパの歌うたうんだけど、沖縄にもこういう歌があるんだよって、かぎやで風と二揚げ1曲歌って。そしたら、このハイルマンさんというのが、「西江先生がこんなに声出て歌うんだから、僕も歌わなきゃダメだ」っていって、いきなり、うまい具合にピアノの、ちゃんとピアノは家にありますから、「はい」って楽譜渡して。その時に、「先生いくつね？」ていうから、「50いくつだ」と。「どんなして声出して」って言うから、「あんたが僕より大きいんだ、あんたが知ってる」て言って。

（会場笑）

西　て言ったら、その時に音楽学部長だった高丈二先生という先生がいたんですよ。この人が「オペラではどの音のどの声はどの声帯を使ってどういう風に出すという決まりがある」っていうんですよ。これには驚いて、いやいや、こういうやり方されると困るなと。

鈴　（笑）尺の音（？）とか、四の音とか。

西　いやいや、こういう歌のやり方は、邦楽ではまずないと思っていますから。日本の長唄とか、長唄の先生その当時いましたから、長唄はどうして声の出し方教えてるんです

かって言ったら、もう対面、今いうかたちでしかやってない。じゃあ、他の地歌舞の地歌とか、ああいう歌もそういう形式ですかって言ったら、そうだって。それからちょっと安心したんですけどね。洋楽の世界の歌いの出し方とは違うんだなって。で、違わなきゃまたちょっとね、おかしいんですけど、民族音楽にはならない話になるんで。同じ声の出し方で同じ声が出るっていうのは。それはちょっと違う話になってきますけど。

鈴　はい。では先生、ちょっとお時間もなかなかいい時間ですので、続いてはちょっと前の方の机を転換して、お写真見ながら少しお話していこうと思います。

（会場設営）

鈴　お写真はいくつか用意してるんですが、はじめは先程話された、組踊と言えば仮名掛けという技術があります。で、岸本吉雄先生という先生の話が何度も出てますけど、本学の安冨祖流の先生もされていた岸本先生が、組踊用の地謡の教本を作られています。その教本をちょっと見ながらお話をしていきたいと思います。

（写真１）

鈴　これですね、『安冨祖流組踊地謡工工四附教本』ということで、岸本吉雄先生のもので、この資料を見ていきます。これの次のページが、

（写真２）

鈴　干瀬節。

西　うん。

鈴　ですね。これが（写真をポイントしながら）セリフなんですよ。若松、「露でやんす花に宿かゆる浮世、慈悲よ御情にからちたばうれ」。女言葉、で、若松があって、「たんで御情にからちたばうれ」、という後ろから数えて二文字目から歌い出しをしますよという指示で、これが、これは三仮名掛けになってますが、二仮名掛けというかたちで歌う、という話ですね。

西　はい。ですから、「からちたぼ……」の時に、「〲さとぅー」って出さなきゃいけないんですけど、私は今、「からちたぼり」「〲さとぅー」にしてるんです。というのは、「からちたぼり」っていう完全に聞かさなきゃお客さんには伝わらないと思って、「からちたぼり」「さとぅーとぅ」にして今教えてるんですよ。それが立方の唱えが完全に意味が分かるように、終わって、た・ぼ・り・さとぅーにした方が流れとしてもいいと思って私は今その方法で歌い、教えてるんですよ。歌も自分がやるときはそういう風なやり方でやってるんですけど。普通は、ですから組踊保存会の中でも討議したことはない先生方、各々考えを持ってやってるわけで。先生が最初の時は、た・ぼ、の「ぼ」から……

鈴　掛かってるわけですね。

西　はい。

鈴　〲からちたぼり

西　（「り」に少しかかるように）「〲さとぅー」ってやる。

鈴　余韻に掛ける感じ。そういう。先生ご自身でやるとどうしても切れてしまうので、今

ちょっとおくればせながら（？）やりましたけども（笑）先生が実際に組踊の研修生であったりご自身の生徒さんに教えるときには、先生が立方のセリフをやる……

西　セリフを唱えて、いやいや遅い、早い、はやってるわけです。

鈴　歌い出しの指示をこれでお稽古されていると。いうことでした。

（写真３）

鈴　で、これが、先生がとても難しいと言っていた、銘苅子の東江節。大アーキーと言っておりますけども。通称ですね。これは東江節の下句だけを歌う。

西　そうですね。二揚げの下句だけを歌ってるわけです。

鈴　はい。これも、母や白雲の〜かくちみらん……というところ。

西　「み」・「ら」で普通は出してるんですよね。これは表記は二仮名掛けか。今あれ、前の干瀬節と表記ほんとは、あれが二仮名掛けで、これは三仮名掛けなんですよ。

鈴　「み」から入りなさいよ、と。

西　「み」から出しなさいよという意味なんです。普通の表記はそうなってるんですけど。でもこれも私は、かくちみら「ん」に入れてるんですよ。

鈴　〜かくちみらん

西　（「ん」に少しかかるように）「〜アーキー」という風にやる。そうしなけりゃ、何て言うんかな、子どもの、うみきいの唱えですから、ちょっと早いんですよね。普通の天女とかそういうのよりは。

鈴　セリフのテンポが速いんですね、子どもだから。

西　唱えのテンポが速いから、その点早く出さなけりゃ繋がらない。

鈴　そして先生、これ、子どもが、子役がやるときには、非常に難しくないですか？子役の声ってすごく高くて、ある意味音程を無視するくらい高い声で……

西　いや、実はね、あれ高くはなくて、低いんですよ。

鈴　あ、そうなんですか、子どもの声は。

西　まあ、高い声の子もいるけど、わりと一般に低く出してるんですよ。

鈴　地声みたいなかたちで。ああ……

西　だから、上から出してるので、（高めに）「〜母親やかくちみらん」「〜アー」って出しやすいんですけど、（低めに）「〜母親やかくちみらん」は「〜アーキー」に繋がらないんですよね。

鈴　ああ、低いと高い声に持って行きづらい。

西　そうそう。そういう面がこの大アーキーの一番難しいアーキーのとこですね。

鈴　はい。これ、だから、組踊ただ見てるだけではほんとに分からないんですけど、ほんとはこのセリフと歌い出しのこの瞬間が、ほんとに地謡と立方が呼吸をしているというか。この一つ一つの繰り返しが組踊全体の劇を作っているというところです。

（写真４）

鈴　あとはこれは、同じ、

西　長子持ですから……

鈴　はい、長子持節で、今は歌うところと歌わないところを分けているという表記ですけれども（笑）

西　いつ頃からこういう風になったかっていう確証がないんですよ。

鈴　先生がもう伝承者として習ってる頃には？

西　にはもう。

鈴　こういう風に歌を短縮して歌ってる。

西　これは時間短縮のためだと私は思ってるんです。これだけ長いこと歌われると立方の人はどう振る舞っていいか。ただまわるだけですから。３回くらい回らなきゃいけない。

鈴　そうですね、舞台３周くらい。

西　３周くらい。

鈴　しなきゃいけない。ずっと俯いて。

西　そういう意味で、この歌を削って、いわゆる主なところだけ入れてると。というように私は理解してるんですけども。

鈴　これ結構私も意外で、もう少し最近こういう風な変更してきたのかなというと、もう復帰後の指定の時にはもうすでにこれになっていたという先生方のお話で。だから大きい先生方はこれが、こういう歌い方が基本という考え方。

西　金武先生、あるいは能造先生、眞境名先生の時にはもうこうなっていたと。

鈴　ああ、もう重鎮たちですね。

西　だからうちの先生はもうこれしか教えなかった。

鈴　春行先生も？

西　春行も。

鈴　ああ、そうなんですね。

西　だから春行先生もいつの頃からこういう風になったかっていうのは、「いや、これいつからなったのかなあ」っていうようなしか。

鈴　ちなみに、こういう風に歌を歌を切ってまとめて、何というんですかね、いいとこどりみたいなかたちで抜粋して歌うっていう組踊、ほぼないんですよね。だから銘苅子のこの長子持節くらい。あとは孝女布晒のアーキーを連続で行くところを少しカットしたりする……

西　えーっと、手水もありますよ。手水も子持が。

鈴　ああ、子持ありましたね、最後の玉津を連れていく、処刑場の場面も少し。

西　処刑のところに連れていくときの場面が、そういう風に。

鈴　抜粋なんですね。だからたまに国立劇場とかの公演で、今回は全部歌いますという不思議なアナウンスというかが出てきたりとかします。これも組踊、今現状のね、伝承している現状という話です。

（写真５）

鈴　で、さっきの三仮名掛けですね。東江節。これは本調子ですけども、これは手水の縁の三仮名掛けの表記ですね。こういう、最後の「紅葉なしゅが」の「な」からかからないといけないという感じですけど。

西　だから、紅葉「な」から、「〽あーさーゆー」というふうになるんですけど、私はもう、「〽紅葉なしゅが」「〽あーさー」というふうに、今教えてる。

鈴　はい。だからこれもやっぱり、教わった先生方の教え方がやっぱり一人ひとり違う。それを演出のところで変えていいというような自由さがあるっていうのが、この組踊のいいところじゃないかなあというところです。台本見ながらの勉強はこれくらいで。あとは、西江先生の思い出話でございます。

（写真６）

鈴　これは、昭和 52 年、新報ホールでやった安冨祖流の鑑賞会。ほぼ毎年やってたんですかね、これ。

西　そうです。

鈴　しかも２日続けて公演するということで、その中から写真があるんですけど。

（写真７）

鈴　これは……さあ、西江先生はどこにいるでしょうか？っていうクイズです（笑）

西　（笑）

鈴　これ、（写真をポイントしながら）こちらですね。右から２番目。

西　慎太郎刈りっていう（笑）

（会場笑）

西　あの当時、石原慎太郎がああいう形にしてたので、私も真似て慎太郎刈りにしたんですよね。

鈴　笛を吹いているのが大湾清之先生ということで。あ、山内秀雄先生もいらっしゃいますけど。こんなかたちで先生方独唱したり、それから民謡も歌ったりしたこともあるという話も昔は……

西　民謡っていうのは、古典民謡なんですよ。

鈴　古典民謡。その時は立って歌うんでしたっけ？

西　立って歌って。伴奏は後ろでやって。

鈴　伴奏は後ろで、自分だけ、歌だけ歌うと。

西　前に。はい。

鈴　はい。なんかそういう面白いスタイルなんですよ。安冨祖流、普通今なら古典音楽だけでわーっといくような感じですけど、古典民謡なんか歌うときは、後ろにこういう地謡がいて、１人だけ前に出てきてマイクの前で歌うというスタイルで発表会をされていたというお話です。

（写真８）

鈴　それからこれは、先生 20 代の頃ですね。芸能祭で歌ってらっしゃる。

西　29 か、20……

鈴　多分ですよ。これ先生が言ったの僕ら書いて 29 歳ですから。

（会場笑）

鈴　先生が変えていただくなら変えていただいて結構ですよ。

西　29 だったか、何かな……23、４、６……あれには、新人賞はいつと……？

鈴　新人賞取ったのは……ああ、先生すみません、昭和 44 年に最高賞受賞からしか書いてない（笑）その３年前ですか？ということは昭和 41 年か昭和 40 年。

西　これは、発表会の時でしょうな。

鈴　発表会。

西　ああ、発表会。箏の人がああいうように、

鈴　うみないびの恰好というか。

西　うちかけ着けるっていうのは、よっぽど演出の人が。

鈴　ああー。

西　やって、歌ってると思ってるんですけど。

鈴　この時期、僕個人的に気になってるのは、かならずこのフサグヮーがついてるんですよね。箏にフサグヮーがついてて、箏もなんかすごい豪華な。

西　そうそうそう。

鈴　最近はあんまり見ないでしょ。

西　見ないですねえ。

鈴　これもいつからなくなったかっていうのがあんまり誰も知らないんですよ。箏の先生も、「最近やらんね」みたいな感じでやってますけど。こういう楽器のかたちというか、飾りの違いなんかもあります。

（写真９）

鈴　これはいつかはほんとに不明と先生おっしゃっていたもので。先生三番目にいらっしゃいますけれども、笛が大浜長栄先生ですね。

西　大浜の長栄先生は、三味線は弾けなかったんですよ。

鈴　あ、そうなんですか？

西　うん。で、僕らの手を見て、笛を吹くという。

鈴　ええ！

西　ものすごい先生で。

鈴　ものすごいですね、ほんとに。

西　だから、分からない歌は、日頃歌ってる歌は、組踊になるとちょっと難しいですから分からないですから、僕らの手を見てやるという。

鈴　ええ！そんな、そんな吹き方を……（笑）ほんとに名人ですね。だからちょっとこっち側向いてるんですかね、これ。

西　多分、そうだと思ってますよ。

鈴　ああ、すごい。で、多分これ舞台の端っこですよね。端っこで何かの伴奏してるものです。おそらくこれも、先生がおっしゃってたんですが、会場はどこか分からんけれども、

西　琉球新報だと思いますよ。

鈴　新報の、

西　新報の、要するに、仮設じゃないかなと思います。

鈴　で、安冨祖流の発表会の時のじゃないかなあということで。先生あんまり写真がない。写真くださいって言うと、「写真はないよ」としか言われないので、秘蔵の写真探してきてもこんなものという感じ。

（写真 10）

鈴　あとはこれ最近ですね。平成 27 年に行われた、国立劇場おきなわの「三線音楽至高の響き」の時の舞台の写真でございます。若手と、それから真ん中にどーんと先生方いらっしゃいますけども。これで写真は終わりかな。ということで、先生、最後になりますけど、若い子たちがいるので、若い子たちに何か叱咤激励とか、メッセージを。

西　いや、叱咤激励というよりも、もう、歌上手すぎますよ。

（会場笑）

西　若い人たちは、私から言うともう色んな歌、情報が多いし、歌もまた声もよく、県芸の学生などは声もよく出てます。国立の研修生に来てる人たちもよく歌うなあと。で、僕などは今一回教えて次からは私が、さっきやったように私が唱えて、はい歌ってちょうだい、というような方向に持って行ってるんですけど。声もよく出てるし、また勉強もよくやってます。芸大生はほんとに有望です。頑張ってちょうだい。

鈴　だそうです。頑張ってください。ということで、西江先生のお話は以上となります。今一度先生に大きな拍手をお願い致します。

（会場拍手）

鈴　ありがとうございます。